

第11回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

「古木鐵太郎の文学游歩」



展示期間 平成26年12月1日(月)～平成27年1月29日(木)

中野区立中央図書館

もくじ

はじめに	2
古木鐵太郎	3
鐵太郎という人物	4
周辺地図	7
作品と評価	9
散歩作家と呼ばれた鐵太郎	9
「子の死と別れた妻」～長男・夏郎の死～	11
様々な人の評価	12
自己評価	13
相関図	14
周辺人物紹介	15
家族・親族	15
雑誌「改造」関係	18
交流のあった文士たち	27
晩年の鐵太郎	33
年表	34
展示風景	41
展示資料リスト	46

はじめに

鷺宮に暮らした小説家・古木鐵太郎が亡くなって、60年の歳月が経過しました。

鹿児島県薩摩郡宮之城村に生まれた鐵太郎は21歳の頃に上京し、山本実彦が立ち上げた改造社にて雑誌『改造』の編集を務めます。そこでは、志賀直哉、芥川龍之介、武者小路実篤といった誰もが一度は耳にした事のある作家を担当し、その作品に触れることで触発され、自身も作家を志すようになります。

鐵太郎の交友関係を探ると、大正・昭和期文学界の真っ只中に居たと言っても過言ではないほど、多くの著名な作家との交流が伺えます。そしてその作家たちは口々に、鐵太郎の人柄とその素朴な作品に称賛の言葉を贈っています。しかし、現在の鐵太郎の知名度は決して高いとは言えません。彼はいったいどんな人物だったのでしょうか。

この展示では、そんな大正・昭和の文学界を歩いた古木鐵太郎という人物を、その作品と交友関係から掘り下げてご紹介します。



こきてつたろう
古木鐵太郎

明治 32(1899)年 7 月 13 日～昭和 29(1954)年 3 月 2 日



昭和 25 年 51 歳頃の鐵太郎

写真提供：さつま町宮之城歴史資料センター

鹿児島県薩摩郡宮之城村に大地主の 6 男として誕生。^{さつまぐんみやのじょう}4 歳のときに母を失う。^{せんだい}川内中学を卒業後、神戸高商を受験するも失敗。横浜の三兄の家に寄宿して予備校に通学。翌年、熊本高工を受けるがこれも失敗する。19 歳から近くの高等小学校の代用教員となり 1 年半ほど勤める。その後、同郷の先輩であり、縁戚でもある山本実彦の紹介で、東京の自動車輸入販売会社に入社する。しかし半年たらずで辞職し、雑誌社である改造社に入社する。

大正 12 年鐵太郎は、下宿先の女主人の紹介で知り合った、村上のふと結婚。長男も誕生した。同年、子のいなかった長兄の養子になり家督を相続。しかし、のふが学生と不義を犯し、3 年ほど続いた結婚生活が終わった。

昭和 2 年に改造を退社したあとの翌 3 年、小林すゑと再婚。三兄に預かってもらっていた長男を引き取る。以後死去するまで、実家の田畑を売って小説を書く生活を送る。昭和 6 年長男が赤痢^{せきり}を患い死去する不幸にあう。すゑとの間には一男二女を授かっている。

文学少年ではなかった鐵太郎は、ジャーナリストになりたいと「ぼんやり」思っていた。しかし、改造社で編集者を経験していくうちに、考えが変わったようだ。^{しがおや むしやのこうじ}志賀直哉や武者小路^{さねあつ}実篤の小説を読み、「こんなふうを書いていいものなら、じぶんだって小説が書けないこともないだろう」と思い、小説家を目指したと語っている。なぜ書くかと聞かれれば「いいものを書きたい」「自分の中にある美を表現したいという思いから」「外の仕事をしていたら結構それで満足していたかも知れませんが、今はこの仕事をしていることを後悔はしていません」と答えている。

上京してからは住まいを転々としていたが、昭和13年に越した鷺宮4丁目の借家には10年間住んだ。さらにその借家が転売されそうになったのを、鹿児島島の田畑を売って買い取り、最後までその家で作品を編んだ。

昭和29年に肺壞疽はいえそにかかり死去。急に様態が悪化した為、死に顔は肉付きが良く端正だったという。享年54歳。生前に出されたのは『子の死と別れた妻』、『現代作家印象記』の2点のみだが、死後友人や家族達が多く作品集を出版した。

!! 鐵太郎という人物 !!

◆頑固・義理固さ

あるとき義兄である佐藤春夫が、生活に困っている鐵太郎を救う気持ちで雑誌編集の仕事を紹介した。鐵太郎は一度請け負ったが、「そんな年少の人々に頭を下げるような、気にそまない仕事はしない」と断ったというエピソードがある。また、『麒麟きりん』に発表した鐵太郎の「子の死と別れた妻」うのこうじを宇野浩二が激賞。それが契機になって、『文芸』その他の雑誌に登場するようになった。宇野は芥川賞の有力な審査員になったから入選するに違いない、と友人で小説家の松原敏夫は思っていたが、肝心の選考会に宇野は欠席、鐵太郎の作品は候補にもならなかった。後で他から聞いた話によると、選考会の開催前に宇野から鐵太郎に、前記作品を芥川賞に推薦したいが、という書簡があったのに対し、鐵太郎は何らの意思表示もしなかった。このことについて、「普通の人だったら直ぐに手紙をくれた人のところへ飛んで行くだらう。少なくとも返事くらいはするであろう」と述べ、しかし「鐵太郎がとった態度はいかにも鐵太郎らしい」「彼にはそういう振る舞いが出来ないのだ。そんなことをするのはいやなのだ。」とも振り返っている。気に入らない仕事をするくらいならば、貧乏なほうが良い、という頑固な性格だったようだ。

また鐵太郎はこんな一面も持っていた。大正の美術評論家であり、小説家でもある牧野吉晴まきのよしが、鐵太郎の没後、思い出話を書いている。終戦後、牧野は友人に頼まれ、中野から出た

区会議員の選挙の応援演説をしていた。その日は土砂降り。客が一向に集まらずにしょげていた牧野の元に、着物の裾を濡らしながら鐵太郎が訪れる。「電信柱のビラに、あんたの名前が出ていたので、懐かしくて…」以前は交流もあったが戦争がはじまり、それまで鐵太郎が中野に住んでいた事も忘れていた牧野。だが、「その時から心からの友達のように思うようになった」と述懐している。こういった鐵太郎の義理固さや優しさは、周囲の人々を惹きつけたのではないだろうか。



◆信心深さ

まつばらとしお

こきてつや

松原敏夫は自著の中で、鐵太郎が一時期「古木鐵也」というペンネームを使った事について、自身の意見を著している。「彼は前夫人との間にできた男の子を病気で亡くしてから方角や鬼門を信じるようになり、それからの家探しには磁石を持ち歩いたそうだが、近年は姓名にこだわりを抱いていた。画数がどうのこうのとか、姓と名の均衡がどうのとか真面目な顔つきで言っていたからである。(中略)であったから「鐵也」という新劇派の登場人物のような名を見て、よせばよいのにと思っ

↑『月刊文章』昭和16年8月号 厚生閣

「わが島の記」(古木鐵也名義での掲載)

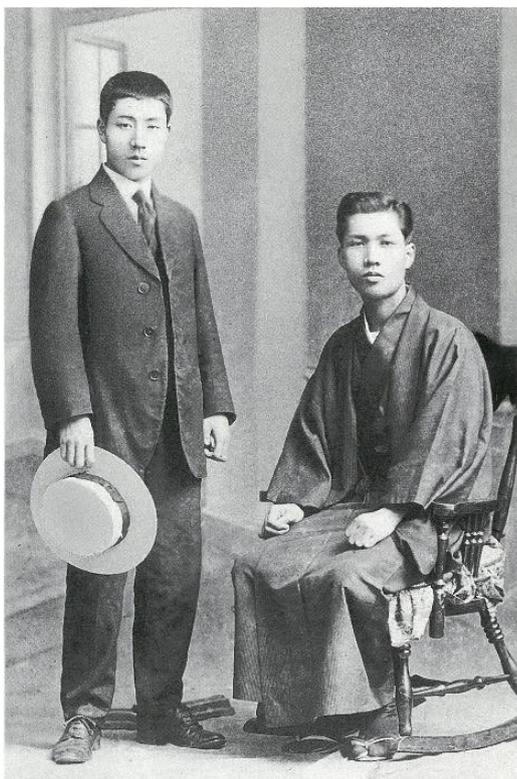
写真提供：かごしま近代文学館

た。」松原自身は全く信じていないようだが、「自分も鐵太郎の立場になったらわからない(信じていたかもしれぬ)」と振り返っている。鐵太郎の信心深い一面

がのぞけるエピソードだ。ちなみに、「鐵也」というペンネームは、政治家でもあり僧侶でもある今東光こんとうこうによる命名。

◆鐵太郎と貧乏

鐵太郎が来客に「最近、お書きになりませんね」と言われ、すゑが「書かないのではなくて、書いても発表させてもらえないだけ」と答えたところ、後から鐵太郎に「さもないことを言うものじゃない」と叱られたというエピソードがある。鐵太郎は貧乏だと言われるのが嫌いだったようだが、彼の貧乏は仲間うちでは有名だったようだ。松原は「誰かが「三貧」といって鐵太郎はその一人だった。他の二人のうちに尾崎一雄が加わっていたと思うがもう一人は忘れた。」と振り返る。また、仲間うちで飲み終わったあと、飲食代を帽子の中に集めていた時のこと。順番に集め、鐵太郎の前に帽子がきた時に、誰かが「あるぞ!」と鐵太郎に声をかけた。仲間は笑い、鐵太郎は苦笑しながらもお金を入れたというエピソードもあった。



◆鐵太郎の容姿

さとうはるお

佐藤春夫は初めて会ったときの事を「彼も20を過

ぎたばかりの美少年であったから」と振り返っており、

しおたにさん

こうだあや

塩谷賛が聞いた幸田文の話によると、当時の鐵太郎

は「腺病質のように白い肌をした好男子」で「切符を

もぎる女性が恋をしていた」ようだ。また、松原敏夫

まつばらとしお

は「彼はやや小柄だが色白の、鼻の秀でた、なかなかの好男子だった。」と語っている。

←大正10年 左：22歳頃の鐵太郎 右：兄の寛二

『古木鐵太郎全集』 三巻より

西武鉄道・西鷹宮駅全景(昭和17~19年頃)

写真提供：中野区広報室



中野区周辺

作品地図

国立中野療養所新館正面(大正15年)

写真提供：中野区広報室



料亭「ほととぎす」(昭和31年10月)

写真提供：中野区広報室

普茶料理「ほととぎす」は、かつて中野にあった高級料亭である。庭での季節しようじん焼き(野菜、木の葉、山菜を炭火で焼きながら食べる料理)は名物だったとい

う。 鐵太郎が生前訪れることはなかったようだが、昭和41年、鐵太郎13回忌の集いが「ほととぎす」で開催された。遺稿集『折舟』の出版記念会もかねており、司会は中谷孝雄だった。かつての文学仲間が集ったが、佐藤春夫、外村繁はすでに亡くなり、上林晝も病気で参加は叶わなかった。

やがて「ほととぎす」は東京都の所有になるが、中野区が買い取った。跡地は現在「産業振興センター」(旧中野区勤労福祉会館)になっている。

練馬区

④

中野区

野方

杉並区

中野駅

中野区白地図 東京地区社製 2007年1月 1/15,000

⑤

③

①

②

⑨

⑦

⑧

⑩

⑪

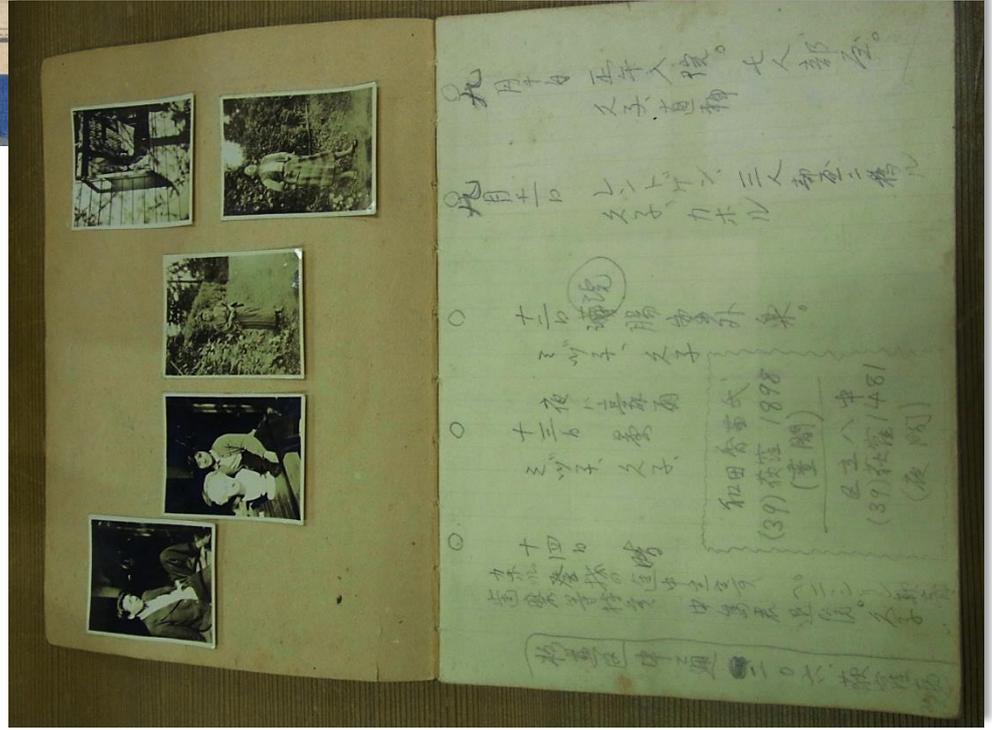
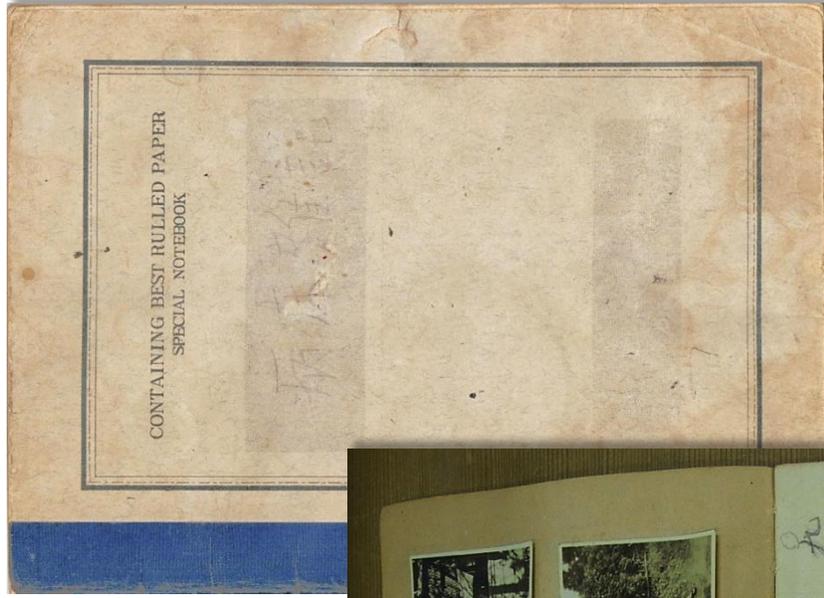
⑫

⑥



作品地図対照表

番号	作品タイトル	地域	備考
①	野方にて	野方	昭和7年、野方に引越し
	晩秋郊外	野方	昭和11年、野方に引越し
②	緑陰	野方	野方の家の話
③	一瓢	江古田	兄家族と散歩 板橋まで
			結核療養所を遠目に見る
④	路傍の花	練馬区	南蔵院へ散歩する
⑤	山桜	練馬区	中村橋へ散歩する
⑥	大正の作家	中野	「ほととぎす」にて鐵太郎 13回忌を行う
⑦	初夏夕景	鷺宮	鷺宮へ引越し
⑧	月の光	鷺宮	線路向こうに新駅（西鷺宮 駅）
⑨	落葉	鷺宮	散歩の途中、鷺宮八幡神社 に寄る
⑩	昨日のこと	杉並区	昭和9年、高円寺に引越し
⑪	子の死と別れた妻	杉並区	河北病院にて、長男夏郎 が7歳で亡くなる
⑫	病床雑記	杉並区	荻窪病院にて、鐵太郎死去



⑫ 「病床雑記」

写真提供：かごしま近代文学館
杉並区荻窪病院に入院時の記録。

紙にうつすと「病床雑記」の文
字が見える

作品と評価

📖 散歩作家と呼ばれた鐵太郎

◆散歩小説

「散歩は自分にとって唯一の道楽とも言えるだろう」と鐵太郎は語る。そう語るだけあって、鐵太郎の小説や随筆には散歩を題材にしたものが多く残されている。

随筆では、野方の風景の美しさを描いた「野方にて」、「菊を焚く」や、妙正寺川の情景を描いた「あちこちの秋」、「武蔵野の秋色」、鷺宮の田園風景を描いた「初夏夕景」などがある（『古木鐵太郎全集』3巻所収）。

文学仲間に「古木さんは他にちょっと類がないほど散歩ずきな人だった」と言われるほど、鐵太郎は季節の変化を楽しみながら散策し、その経験を作品にした。友人たちはこれらの鐵太郎作品を「散歩小説」と呼んでいた。

例えば「山桜」（『古木鐵太郎全集』2巻所収）という小説は、娘二人を連れて散歩にでかけた場面から始まる。偶然見かけた梅の木から、故郷の美しい山桜の情景を連想し、少年時代の思い出へと展開していく。「落葉」は、父親が散歩途中でゴム毬を見つけた話を娘にすると、「どうして拾ってこなかったの」と悔しがるので、娘を連れてそのゴム毬を探しに行く話だ。ついにゴム毬を見つけた娘が嬉しそうで、心温まる話となっている。

このように、散歩にまつわる素朴で素晴らしい作品が多いのが鐵太郎文学の特徴だ。鐵太郎にとって散歩とは、単なる道楽ではないのかもしれない。

◆鐵太郎と秋

鐵太郎は、秋が好きだった。盛んな夏が去り、秋の気配が漂う初秋。「この時期は寂しく夏を引きとめて置きたい気持ちになるが、そういう初秋の良さはまた格別だ」と語っている。秋の澄んだ空気や美しい陽の光に、鐵太郎は身も心も気持ち良くひきしまるのを覚えた。

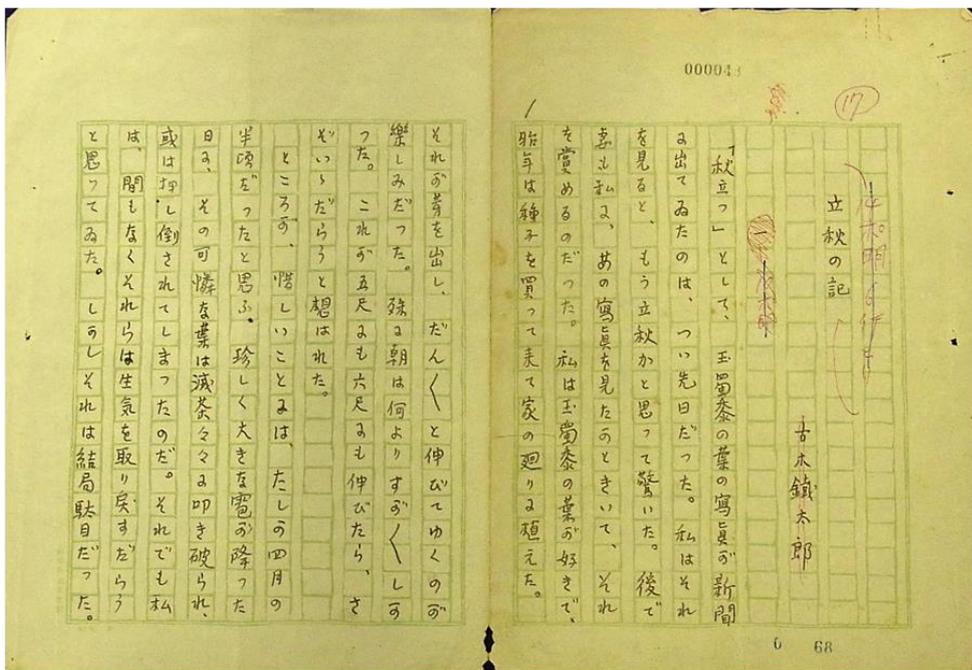
野方に住んでいた頃、鐵太郎は妙正寺川によく散歩に出かけた。ある日の夕刻、鐵太郎は今まで経験がないくらいの「深い秋」を味わう。「遠い西の山蔭に陽が隠れようとする前で、

金色の光芒がさんさんと半曇りの空から地上に降りそそいでいた。そうだ、まるで無数の光の粉が雪の様に降っている様だった」と感動した。野方の美しい秋の情景は、他にもある。大根畑や芋畑が広がる様や、神社の境内に夕日が延びている様子を、鐵太郎は名画に例えている。

◆鐵太郎と子供たち

鐵太郎は、散歩に自分の子供を連れていくことも多かったようだ。尋常小学校1年の直輔を連れ、西武線野方駅から上井草駅まで行き、そこから三宝寺池（石神井公園）まで歩いて行く計画を立てた。親子で、電車の窓から富士山を探したというから、ほほえましい。冬の風が冷たい季節だった。

長女・薫子とは、自宅周辺を散歩した。薫子は風邪で寝込んでいたが、だいぶ回復したようなので、「その辺を散歩してみようか」と誘ったのだ。小春日和の暖かい日だった。鐵太郎は雑草の中に生えていた黄色い小菊を摘み、薫子に渡してやったという。その日は随筆に書く話題に困っていたところだった。鐵太郎が「今日のことを書こうか」と薫子に問うと、薫子は「うん、それがいい」とにこにこ笑った。鐵太郎の、作家とはまた違う父親としての顔である。



原稿「立秋の記」（『古木鐵太郎全集』三卷所収）

この作品の中でも、鐵太郎は子どもとの散歩を楽しんでいる写真提供：かごしま近代文学館

「子の死と別れた妻」～長男・夏郎の死～

鐵太郎は、私小説風の作品を数多く残している。「子の死と別れた妻」もその一つである。昭和6（1931）年、鐵太郎は長男・夏郎をわずか7歳で亡くしている。赤痢だった。夏郎は、前妻・のふとの間にできた子だが、鐵太郎の再婚により、後妻・すゑに育てられていた。

随筆「病院のある風景」（『文芸随想』所収）には、夏郎の入院から死について記されている。伝染病のため、入院時の看護婦たちの様子はバタバタと慌ただしかった。すゑは当時2歳の直輔を看護婦に預けて看病し、鐵太郎は起き上がろうとする夏郎を叱り、「お父さんはお前の病気が早くなおるように叱ったのだからね」と声をかけた。夏郎は「お父さんやお母さんに心配かけてすまない」と悲しそうだったという。

一週間の闘病で、夏郎は息を引き取る。すゑの計らいで、実母・のふも夏郎の死に立ち合っている。病気が病気のため、自宅へ遺体を運ぶこともできず、病院の屍体室で通夜をした。鐵太郎は「今まで生きていた子供がもういなくなったのだと思うと、何とも言えない悲しさが強く襲って来るのだった」と語っている。「子の死と別れた妻」は、そんな鐵太郎の悲しい体験を元に描かれた小説である。

これとは別に、^{なかたにたかお}中谷孝雄の「母」（『古木鐵太郎全集』3巻所収）という小説がある。こちらは、鐵太郎に当たる「Sさん」の隣人の視点で書かれた、夏郎の死と家族の姿である。

『子の死と別れた妻』は昭和13（1938）年、赤塚書房から刊行された、生前唯一の創作集である。宇野浩二が「心の戸を叩く文学」と推賞したことにより、広く文壇に知られるようになった。昭和13年下半期（第8回）の芥川賞候補になるのではと噂されたが、それには至らなかった。

📖 様々な人の評価

たかみねじろう
高峰二郎

「この作者は人間としてもっとアウドク意地悪くならぬといけない」

「もっともっと突っ込んでいって人間の内面的心理に触れた力強いものが書けないものかと訊いてみると、彼の友人達は彼にそれを求めるのは無理だといふ。成程さう云はれれば彼の人柄はどこまでも素直な謙譲に落ち着き澄んだ感じだ。」

文芸通文

ひかわいさお
氷川烈

「今の世に珍しい善良な作者である。作家はもつと悪党的なものもあっていいんだが、しかしこれはこれだけで、少数の人に愛されるべきものであらう。」

「何よりも先きに作者の穏やかな人格を感じるのである。」

ながいたつお
永井龍男

てらざきひろし
寺崎浩

「瀧井孝作氏などと同じ位の人で当然文壇の一角にあって認められていていい人だ。作品もすでに不動の位置にある。」

「古木君ほど純粋な作家は珍しい」

あさみふかし
浅見淵

にわふみお
丹羽文雄

「作者の顔を知っているので、氏にはかうした種類の小説しか書けないのだと毒舌はひっ込んでしまふのである。」

「(前略) 余りにもおとなしい作者の人柄がこの作品を平凡ならしめているのは遺憾である。古木くんもいい作品をかいているのだが」

へんみひろし
逸見廣

おざきかずお
尾崎一雄

「(前略) 覇気がないとか何とか悪口を云ふ人もいるが、これは古木君ののっぴきならぬ持味だ」

「(評論を書くにあたって) かういふ風に素朴で強くつては、批評家など物を言っただけ馬鹿をさらけ出すようなものである。色気のない作家は全くこまる。批評をする方の一人芝居になってしまうからである。」

いとうせい
伊藤整

こうだあや
幸田文

こうたろはん
「(幸田露伴が改造社の作品を) こんなに沢山書いたのにはほかの理由ももとよりあるが古木鐵太郎という人が気に入ったからでもあらうか」

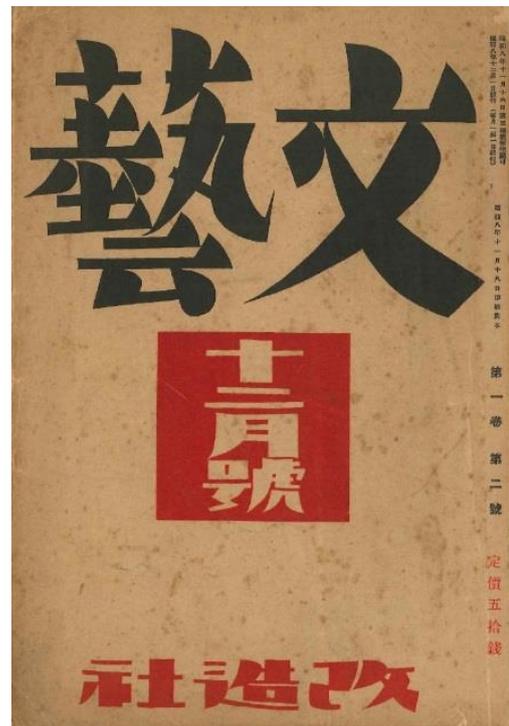
📖 自己評価

鐵太郎は自分自身の性格をどのように思っていたのか。自著には「自分は人に嫌われる性質をもっているのかもしれない。そういえば、自分には多分に変なところもあるようだ」と書いており、生前葛西善蔵^{かさいぜんぞう}が鐵太郎に繰り返し言った「栄える人には確かにそれだけのものが備わっている。栄えない者には矢張りそれだけのものがないからだ」という言葉を考えると、「自分の場合でもそれは当てはまっていると思う」と反省している。「薄志弱行・優柔不断」というのが鐵太郎の厳しい自己評価だったようだ。

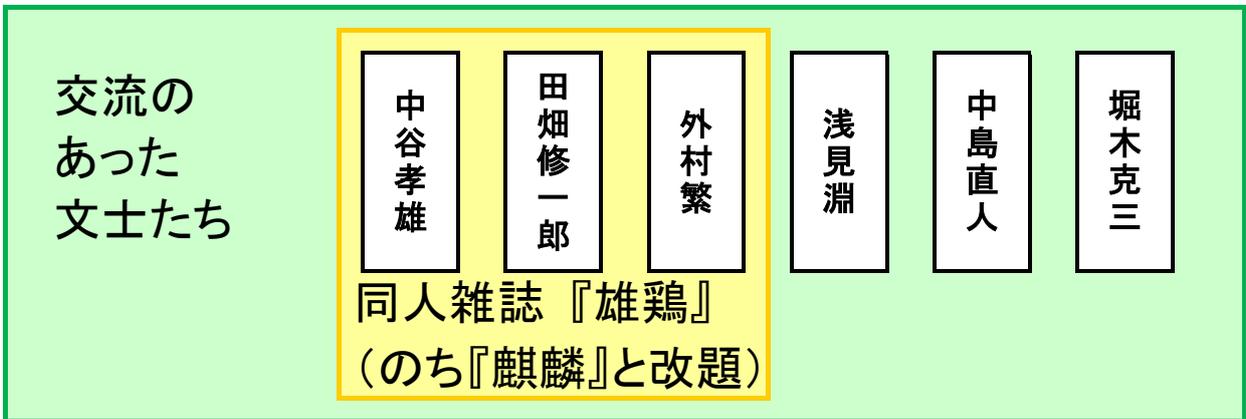
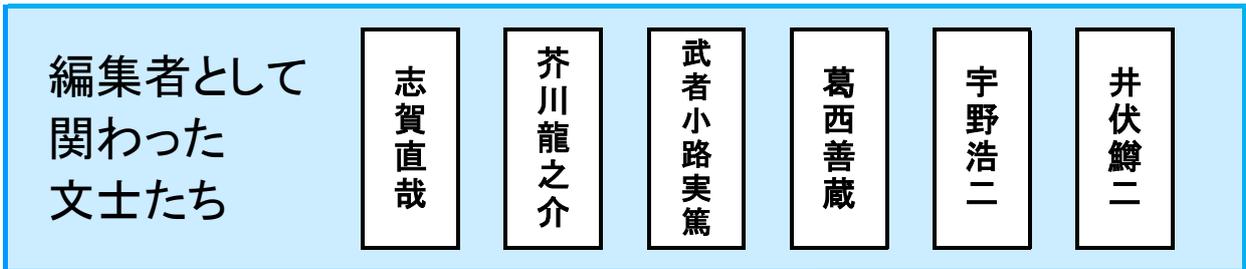
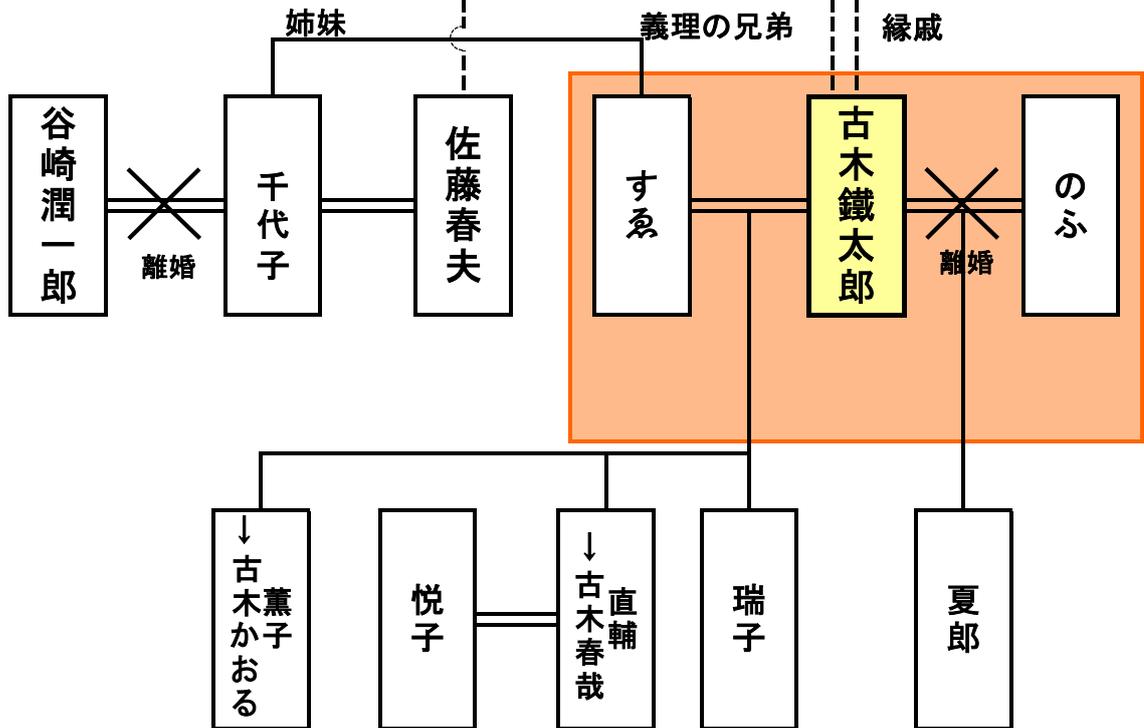
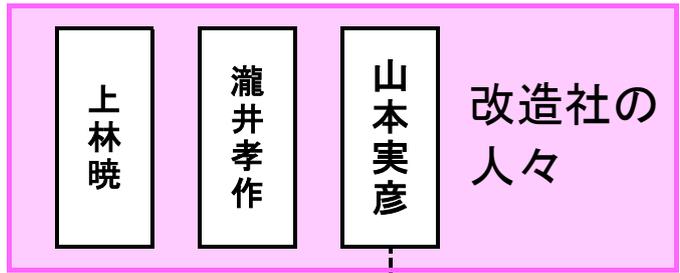
→『文藝』 昭和8年12月号 改造社

「兄の死」掲載

写真提供：かごしま近代文学館



古木鐵太郎相関



!! 周辺人物紹介 !!

家族・親族

こ き は る や 古木春哉

昭和 5(1930)年 5 月 15 日～平成 16(2004)年 12 月 5 日

文芸評論家。杉並区高円寺生まれ。鐵太郎の次男で、本名は直輔^{なおすけ}。著書に『保田與重郎^{やすだよ じゅうろう}の維新文学』、『わびしい来歴』がある。享年 74 歳。

『日本浪漫派』創刊に関わった保田與重郎^{なかに たかお}、中谷孝雄両氏の近所に住んだ経験があり、幼少時代より浪漫派思想が身近にあった。自身も「日本の伝統への回帰」を提唱する浪漫派の精神を引き継ぎ、熱心な批評活動をするに至る。

作家としての鐵太郎を尊敬しており、鐵太郎の死後は自分も作家になろうと考えていた。

「思い出の父は常に美しい人として生きている」と語る。

たにざきじゅんいちろう^{せいじ}
谷崎潤一郎の弟・精二氏と親しい交流があり、仕事を紹介してもらったこともある。大学時代の同級生に大河内昭爾^{おおこうしょうじ}がおり、大河内は鐵太郎文学の熱心な研究者であった。

こ き 古木かおる

昭和 7(1932)年 5 月 8 日～

児童画教室主宰。エッセイスト。東京生まれ。鐵太郎の長女で、本名は薫子^{かおるこ}。著書に『絵が描ける子描けない子』、『花の小径^{こみち}』がある。

父・鐵太郎の死後、遺品の中に埋もれていた「今昔物語」の原稿を見つけた。これは昭和初期に鐵太郎が現代語に訳したもので、佐藤春夫^{さとうはるお}・宇野浩二^{うのこうじ}の企画で出版予定だったが、実

現していなかった。かおるは、親も子も読める本になることを願い、仮名使いや言葉使いを現代的に改めた上、鐵太郎の訳から数十年の時を経て出版した。「鐵太郎の平易で品位ある文章を出来るだけ損わぬよう心がけた」と語っている。

さとうはるお
佐藤春夫

明治 25(1892)年 4 月 9 日～昭和 39(1964)年 5 月 6 日

小説家、評論家。和歌山県出身。大正 2 年慶応義塾退学。大正 6 年、同人雑誌『黒潮』に「病める薔薇」（『田園の憂鬱』の第一稿）が掲載。翌年には、改作『田園の憂鬱』を刊行。大正 9 年頃、谷崎婦人の千代子との間に恋愛感情が生じる。春夫はこの三角関係を主題とした「この三つのもの」を連載したが、完成することはなかった。昭和 5 年、妻・タミと離婚。同年、谷崎夫妻との協議の結果、谷崎の妻・千代子と結婚するに至った。享年 72 歳。

谷崎潤一郎の前妻で春夫の妻・千代子は、鐵太郎の妻・すゑの姉である。春夫にとって鐵太郎は、義弟となる。小説家としてのつき合いはあっさりしたもので、原稿を見せに來たり、相談したりということはほとんどなかった。唯一、改造社時代に仲間と作った同人文集の表紙に何か書いてほしいと頼んだことがあるが、それきりだった。「僕によって文壇に出ようなどと考えることさえ彼には好ましくなかったのであろう」と春夫は語る。

大正 10 年頃に改造社時代の鐵太郎に始めて会った時から、30 年あまりの交際となったが、やがて絶交してしまう。生活に困った鐵太郎に雑誌編集の仕事を紹介したが、「気にそまない仕事はしない」と断られたことが春夫の癪にさわったのだ。以来、二人が会うことはなかった。

春夫は鐵太郎の死後、遺稿集『紅いノート』の出版祝賀会で「今にして思えば決して悪い言い分ではない。芸術家としては当然の立派な言い分である。一生気にそまぬ事はせず、生涯を気の向くままに書き通せる文学青年であったことは、めでたい生涯だったと思う」と語り、和解の意思を表明している。

鐵太郎は、どんなに追い込まれても春夫に頼らなかった。^{あさみふかし}浅見淵も鐵太郎と春夫の関係に触れ、「古木君は気概のある人物」と語っている。

たにざきじゅんいちろう
谷崎潤一郎

明治 19(1886)年 7 月 24 日～昭和 40(1965)年 7 月 30 日

小説家。東京生まれ。大正時代の作風は「悪魔主義」と呼ばれ、同時期には映画にも興味を示す。代表作は「痴人の愛」、「春琴抄」、「卍」、「細雪」、「蓼喰ふ虫」など。「源氏物語」の現代語訳も手掛けている。享年 79 歳。

2 度の離婚を経て根津松子と結婚した際には、終世の伴侶を得て作風も安定した。マゾヒズムや美意識などその独特な文学世界を展開しており、熱狂的な女性ファンに家に乱入された事もあったようだ。世間の注目をあびる事も多かった谷崎だが、弟(三男)の谷崎終平は自著で「兄は大変依怙地者だが、心底はやさしい人間だった」と振り返っている。

鐵太郎は出版社に勤めていた時に谷崎の原稿をもらいにいき、そこで妻となる小林すゑと出会った。「妻譲与事件」として世間に注目され、谷崎から佐藤春夫に嫁いだ小林千代子は、すゑの姉にあたる。また、この姉妹には「痴人の愛」のヒロイン「ナオミ」のモデルとされる四女せい、「刺青」「お艶殺し」のモデルである長女はつもいる。鐵太郎はこの話題性豊富な姉妹については著書で触れていない。鐵太郎の作風とは合わなかったようだ。鐵太郎がこの姉妹の中で、すゑ以外に唯一小説に書いているのは三女きみ。「みのうへ」という作品に登場させている。

雑誌『改造』関係者



やまもとさねひこ
山本実彦

明治 18(1885)年 1 月 5 日～昭和 27(1952)年 7 月 1 日

出版経営者、政治家。^{せんだい}鹿児島県川内市に生まれる。『やまと新聞』でロンドン特派員を経験したのち、大正 4 年東京毎日新聞の社長に就任する。同 8 年、改造社を創立し、総合雑誌『改造』を創刊。その後、改造社の経営が苦しくなった時に『現代日本文学全集』を刊行、円本ブームをおこし会社を立て直す。昭和 5 年衆院議員に当選。戦後、協同民主党の初代委員長になるが公職追放され、再び改造社の社長に就任する。胃潰瘍の術後、体調が戻らず死去。享年 67 歳。

鐵太郎と山本は縁戚関係であり、鐵太郎が鹿児島から上京した際には、山本の家へ寄宿し、就職先の自動車輸入販売会社を紹介してもらった。一年半ほどで退職した後、山本が立ち上げた改造社に入社した。

社員だった西園廣志は、当時の山本を「先生は全くの独裁者で、改造社の全活動は先生の



意思通りに行われました。が、性急で気に食わねば即座に誰彼となく鉄拳を振るわれたので、社員も勤まらず、わけても書生は逃げ出すものが多かったのです。」と振り返っており、鐵太郎も沢山怒られたようだ。^{たきいこうさく}滝井孝作は改造社をやめても、山本にこき使われている悪

改造社前(大正 11 年) 写真提供：さつま町宮之城歴史資料センター

夢をしばしば見たといい、それは鐵太郎も同様で、「貧乏しているから山本さんに帰ってこいといわれる夢」を見たようだ。鐵太郎は「『公論』という雑誌編集にいたときも、^{ていしんしゃ}通信社にいたときもサラリーマンだったが、そういう夢は一度もみない。俺は『改造』にいたときのああゆう夢だけを見る。これは山本さんの一つの性格の現れじゃないか」と滝井に語っていたようだ。ただ、^{かんばやしあかつき}上林 暁 は後に「剛腹で通っていた山本社長も古木さんだけではどうしても悪く言ふことができないと言っていた」と語っており、山本は鐵太郎の人柄を大事に思っていた事が分かる。



も悪く言ふことができないと言っていた」と語っており、山本は鐵太郎の人柄を大事に思っていた事が分かる。

そうして社員から恐れられていた山本だったが、改造社は他の雑誌社よりも多く原稿料を払う事にしていた。その為、「改造社の旧社員で、山本の悪口をいわないものはないが、作家で山本の悪口をいうものはない」

(『改造社と山本実彦』^{まつばらかずえ}松原一枝著)と後世言われている通り、多くの著名作家が『改造』に原稿を寄せ、鐵太郎が沢山の作家と関わる機会も与えられた会社であった。

鐵太郎にとって7年間務めた改造社での経験は貴重であった。

むしやのこうじさねあつ
武者小路実篤

明治 18(1885)年 5 月 12 日～昭和 51(1976)年 4 月 9 日

小説家。代表作に「或る青年の夢」や「友情」がある。大正 12 年の関東大震災の影響で出版界全体が不況となり、雑誌の廃刊、休刊が相次いだ。その中で『改造』は「大震災号」として発刊。武者小路にも原稿を依頼している。昭

↑→雑誌『改造』4 卷 3 号(大正 11 年 3 月) 改造社
武者小路実篤の『或る男』の掲載号 資料協力：東京都立図書館



和初期、改造社からの印税が入るが、武者小路の作風が時代に合わなくなり不遇の時代となる。しかし、昭和14年「友情」の延長線上の作品「愛と死」で返り咲いた。享年90歳。

武者小路は、古木の人生に影響をもたらした一人である。改造社時代の鐵太郎が、編集者として武者小路の原稿依頼に関ることになり、「或る男」と出会う。毎月これを読んでいる内に非常に好きになり、彼の小説集を買い集めるまでになった。同じく改造社に勤めていたたきいこうさく瀧井孝作がこの様子を見て、「武者さんの小説を読もうと思へば、ここ（鐵太郎の下宿）に来ればいいなあ」と言って笑ったという。『改造』の創作欄の校正をしていた鐵太郎だったが、文学が分かるようになったとは思っていなかった。しかし武者小路やしがなおや志賀直哉の小説を読みあさる内に、文学への興味が増していった。「武者小路氏や志賀氏の小説は、なんの飾り気もなく自由な文章で、こんな風にも書いてもいいものなら、自分だって小説が書けないこともないだろう」と小説家を志すようになった。

武者小路の自宅を訪ね、文学の話もした。武者小路は、志賀の小説について「事実をそのまま書いた良い作品がある」「事実の話を書く場合は空想を入れず、そうでない場合とをはっきり分けているらしい」などと批評した。

鐵太郎の著書に、改造社時代に出会った作家をまとめた『大正の作家』があるが、その中でも武者小路について取り上げている。鐵太郎にとって、いかに武者小路が印象的な作家であったかが分かる。

しがなおや 志賀直哉

明治16(1883)年2月20日～昭和46(1971)年10月21日

小説家。学習院高等科時代に、小説家を志すようになった。明治39年、東京帝大英文科に入学。武者小路実篤らとともに「十四日会」なる文学研究会を作り、各自原稿をもち寄って綴じた雑誌『暴矢』（後の『野望』）を生み出すなど活動した。『野望』は後に、他の二つの同人雑誌と統合、さらに同人にありしまたけ お有島武郎らを迎え『白樺』が創刊された。この創刊号に「網走まで」を発表し、小説家として本格的に活動を始める。代表作に「あんやこうろ暗夜行路」、



「城の崎にて」がある。『暗夜行路』は大正 10 年から『改造』に連載を始めたが、その後長い休載期間に入ったため、完結するまで実に 17 年もかかった。志賀唯一の長編小説である。

鐵太郎は改造社時代、千葉県我孫子にある志賀直哉しがなおやの自宅まで原稿を取りに行くなど、面会する機会も多かった。志賀に会うまで厳格で窮屈な人物を想像していたが、実際はあたたかく柔らかな印象であった。その時に志賀が執筆していたのが、「暗夜行路」である。以後、何度も志賀の家に足を運んでは「暗夜行路」の原稿をもらい、帰りの電車の中で読むのを楽しみにしていた。鐵太郎は

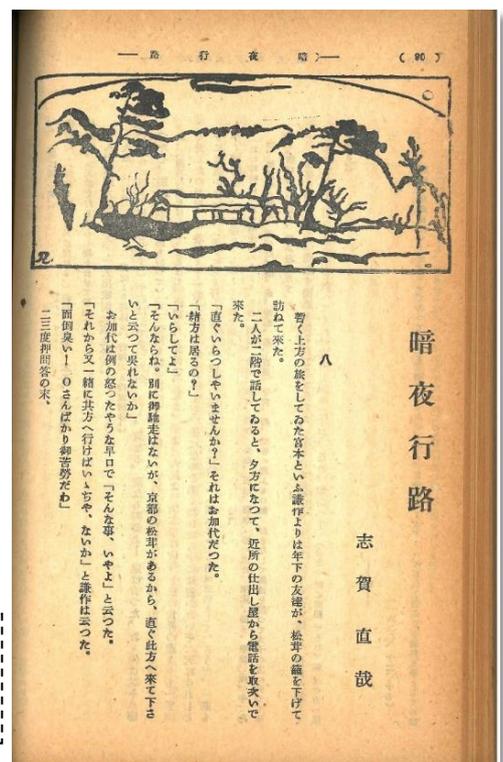
その思い出を、随筆「手賀沼」（『折舟』所収）に記録している。

それまでは文学をやろうなどとは思っていなかったが鐵太郎だが、志賀を始めとする小説を読み、それは変わる。校正のときに改造社社長の山本実彦やまもとさねひこに「暗夜行路」の感想を問われ、「それまでに味わったことのない面白さで、強く心に響いて来た」と語っている。

志賀の自宅はのどかな場所にあった。少し奥に入ると畑道になり、隣家は百姓らしかった。山、葦の生えた湿地、田んぼ、そして手賀沼に囲まれている。鐵太郎が約束の日時に原稿を取りに行ってもできていたためしがなく、静かな環境に心が柔らぐのを覚えながら待っていた。

鐵太郎の著作に『大正の作家』がある。これは鐵太郎が出会った作家の印象記である。昭和 41 年の朝日新聞の記事に「深い傾倒を示した文章が見られる」とある通り、志賀は鐵太郎の中に、印象深く残る人物となった。

↑→『改造』3巻2号(大正10年2月)改造社
志賀直哉の『暗夜行路』掲載号。資料協力：東京都立図書館



かさいぜんぞう
葛西善蔵

明治20(1887)年1月16日～昭和3(1928)年7月23日

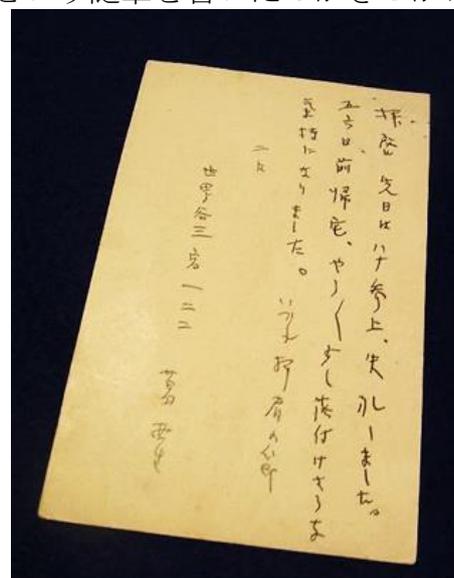
小説家。青森県生まれ。大正元年に広津和郎らと同人雑誌『奇蹟』を創刊し、「哀しき父」、「悪魔」などの秀作を発表した。家計は苦しく病気を患い、それを紛らわす為の酒びたりの生活を送った。享年42歳。おもな作品に「子をつれて」、「蠢く者」、「椎の若葉」、「湖畔手記」など。

浅見淵が「(前略)酒に淫する許りではなく、一たび酔いを発すると、相手の癢に触るような辛辣な毒舌を次から次へと吐き、止まるところを知らなかった」と葛西を語っている様に、葛西の酒乱癖は皆周知のことであった。しかし、鐵太郎は「自分とのあいだでは不思議に一度もそうゆうことは無かった」と、酒を飲んだ葛西とは揉めなかったようだ。一度だけ不穏な空気になったのは、すき焼きのような鍋で肉を焼いている時のこと。葛西が醤油が少ないなど文句を言い、それに対して「なに、これでいい」とムツとして答えたというものだ。葛西はすぐに機嫌をなおしたが、その後少し淋しそうな様子に見えたのが自分も苦しかった、と振り返っている。

鐵太郎は自著の中で、葛西との思い出を多く書き残した。内容も、葛西の淋しさや無邪気さ、真面目さを扱っていて、温かい印象を受ける。葛西は鐵太郎が編集者としてはじめて出会った小説家であり、自身が小説家になったのも、「あなたもなにか一つ書いたらいいでしょう」と葛西に勧められ、「日光湯元にて～都の妻に～」という随筆を書いたのがきっかけとなった。葛西の作品の中でも、優れたものとして評価を受けている「椎の若葉」は鐵太郎が談話筆記した作品である。この作品の中で葛西は鐵太郎のことを編集者ではなく、「若い友達」という風に表現している。

鐵太郎にとって葛西は「これまで接した小説家のうちで最も印象深い人」だった。

葛西より鐵太郎へ
写真提供：かごしま近代文学館



たきいこうさく
瀧井孝作

明治 27 年(1894)年 4 月 4 日～昭和 59 年(1984)年 11 月 21 日

小説家、俳人。岐阜県生まれ。志賀直哉^{しがなおや}を生涯の師とする。時事新報社文芸部記者を経て、大正 9 年、改造社の記者となる。改造社では、鐵太郎の先輩にあたる。口数は少ないが、あたたかい親しみある人物であった。享年 90 歳。

編集者として勤めていた瀧井だが、業務の傍ら自分でも文学雑誌に作品を発表していた。鐵太郎は瀧井の下宿を訪れ、書きかけの原稿を見せてもらうこともあった。後の処女作となる「父」の原稿を見せてもらった時、鐵太郎は「文章が読みづらくてよく頭に入らないが、印象は強く残る」と感想を持った。この「父」という作品は、およそ 1 年かかって書きあげている。

鐵太郎が入社して半年後、瀧井は本格的な作家活動をするために改造社を退社し、転居。翌年また転居し、志賀の住む我孫子へ移った。鐵太郎は志賀の原稿をもらいに月に一度は我孫子に行っていたので、必ず瀧井の元も訪ねたという。

瀧井は、随筆「我孫子の思出」(『瀧井孝作』所収)に、志賀との思い出を記している。「志賀さんの仕事は大方夜分、家族の寝しずまった時、^{はかど} 捗るらしかった」と、庭先の縁台に机を置いて、ランプの明かりで仕事をする志賀の様子が描かれている。

瀧井の代表作には「無限抱擁」^{むげんほうよう}があるが、この作品は第一稿から最終稿を書きあげるまでに 3 年を要している。初めから長編として書かれたものではなく、短編風に一章ずつ書いたものを、できた順(第 2 章「竹内信一」、第 3 章「無限抱擁」、第 4 章「沼辺通信」、第 1 章「信一の恋」)に発表したもの。始めに発表した時には、4 つの短編が 1 つの長編の章となることは考えていなかった。「珍しくないこととは言えない」と考える鐵太郎は、その理由を「労をいとわずに仕事に手間をかけ、こうして書かれてきたその一つ一つの作品が、よく調和して、長編となっているようなものもまた類を見ないからだ」と語っている。

かんぼやしあかつき
上林 暁

明治 35(1902)年 10 月 6 日～昭和 55(1980)年 8 月 28 日

小説家。高知生まれ。昭和 2 年 4 月、改造社に入社。昭和 11 年、古木鐵太郎、外村繁、浅見淵らとのむらしげる あさみふかしと同人雑誌『文学生活』を創刊した。作品に、妻を夜通し看病した自身の経験を描いた、「聖ヨハネ病院にて」などがある。享年 77 歳。

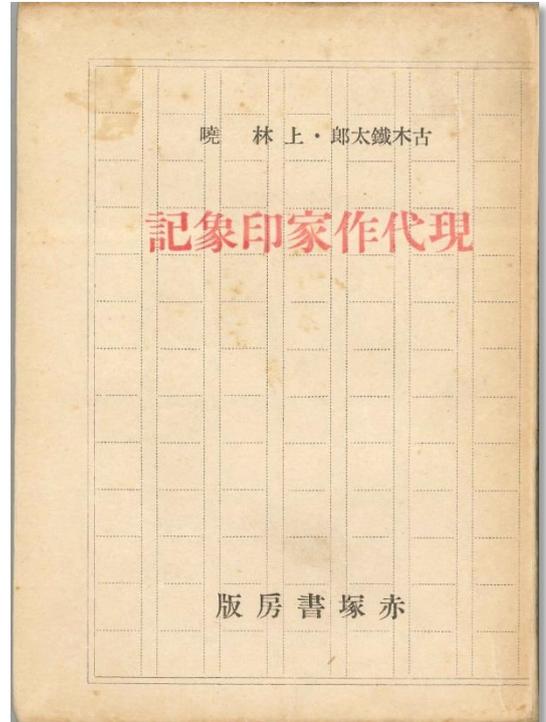
鐵太郎とは改造社で知り合った。鐵太郎の方が先輩社員だったが、上林の入社後まもなく辞めたため、同僚として仕事をしたのは 3～4 ヶ月ほどだった。

改造社時代、上林にとって忘れられないエピソードある。昭和 2 年 6 月の『改造』にこんな広告が載った。あくたがわりゆうのすけ芥川龍之介の「三つの窓」の広告であるが、「芥川氏の所謂筋のない小説を示せるもの」と紹介された。それに対して芥川が、「筋のない小説の代

表的なものだと広告が出たが、あれは筋のある小説だ」という意味の反論をしてきた(『文芸的なあまりに文芸的な』所収)。その広告を書いたのが鐵太郎だった。

互いに改造社の社員でなくなった後も『文学生活』などで交遊を深め、昭和 14 年には共著で『現代作家印象記』を刊行した。記者時代に会った作家の印象を綴ったもので、あさみ浅見淵は「なんらかの意味で強い感動を唆らぬ作家は、だれ一人取り上げていない」と述べている。

鐵太郎の死後、妻・すゑから形見を譲られたことがあった。鐵太郎のインバネス(ケープのついた袖なしの外套)だった。入院中、「退院する時に着るのだ」と買わせたが、結局着ることはなかった。上林は「高価なものを貰うわけにはいかない」と丁重に断るが、すゑも「上林さんに着ていただけると、古木も喜ぶます」と引かなかった。そのインバネスは、上林に丁度良い大きさであった。



↑『現代作家印象記』赤塚書房
写真提供：かごしま近代文学館

あくたがわりゅうのすけ
芥川龍之介

明治 25(1892)年 3 月 1 日～昭和 2(1927)年 7 月 24 日

小説家。東京都生まれ。東京帝国大学在学中の大正 5 年に第 4 次『新思潮』創刊号に発表した「鼻」が夏目漱石なつめそうせきに認められる。代表作は初期の古典を材料にした「羅生門らしょうもん」、「芋粥いもがゆ」、「地獄変じごくへん」など。昭和 2 年に自殺。享年 35 歳。

芥川と鐵太郎は作家と編集者という関係。鐵太郎は『大正の作家』の中で「まずその長髪が目につき、丁寧にお辞儀をするので、髪が畳に届き、顔をあげながらすばやく両手でそれをかきあげる癖がある」「知識が豊富で芸術を愛していた」と印象を語っている。

芥川は「菊池が言い出してこの前二人で話したんだけど、あなた（鐵太郎）や中央公論の T 君にはいつも原稿の催促に来てもらって大変だから、いつか二人をよんで御馳走しようじゃないかと話しているんですがね」という話を鐵太郎にしていたが、結局この話のあとに食事に行ったのは、鐵太郎と菊池寛きくちかんの 2 人きりであった。しかも、菊池自身は食事をせず、鐵太郎だけが御馳走を頂いたので、落ち着かない席での食事になった様だ。芥川とはその後に、滝井孝作も含めて 3 人で蕎麦屋に行っており、鐵太郎は 2 人の話しているのを聞くのが好ましかつたと振り返っている。また、古木夫人であるすゑは、若い頃に姉のすすめもあってか芥川に自身の習作を読んでもらっており、「かわいそうだけでは小説にはならないよ」「自分のことだけお書きなさい」とアドバイスをもらっている。

最後に鐵太郎が芥川に会ったのは、芥川が自殺する数カ月前だった。「短歌の形式は滅びるか」という雑誌の質問に対する原稿を、鐵太郎が芥川の家を受け取りに行った時であった。その時の原稿は「又一説?」という題名で発表されている。

うのこうじ 宇野浩二

明治 24(1891)年 7 月 26 日～昭和 36(1961)年 9 月 21 日

小説家。福岡生まれ。大正 8 年「蔵の中」でデビューする。一時精神に変調をきたしたが、昭和 8 年『枯木のある風景』で復帰。^{ひろつかずお}広津和郎とともに松川事件裁判判決の不当を訴えた。享年 70 歳。おもな作品に「思ひ川」、「子を貸し屋」、「世にも不思議な物語」など。

^{あさみふかし}浅見淵がいうには「いつまでも一人で喋り続けていて倦まない人」であった。浅見が上^う高地の宿に行った時、宇野の喋るのがたまたま^{なかにたかお}、中谷孝雄と一緒に別の部屋に泊まったというエピソードがある。宇野とよく旅行に行く^{たばたしゅういちろう}田畑修一郎は、興味のもてる話は聞くが、そうでない時は別の事を考えて乗り切っているようだ。^{きやましようへい}木山捷平の日記にも「(前略) 宇野さんヨーという。一人でしゃべっているのをきき小生何も話さず」とある。

そんな宇野の事を鐵太郎もやはり「話好き」と表現している。「よく話が脇道に逸れるが、一周して再びもとの話に戻る所が面白い」「熱心な聞き手でもあり、それが小説家気質の表れである」としている。また、「宇野さんは雷鳴を怖がる事非常なものだった。(中略) 真赤な顔をして押入れから出てきた時は皆大笑いだった」とも振り返っている。

大正 13 年菊富士ホテルの一室で、色んな人物の訪問を受けた事を宇野が書いているが、その中に鐵太郎も入っている。「(前略) 古木は、その時、『改造』の記者で、柴山は、前に、『女性改造』の記者をしていた人である。つまり、この二人は、馴染みの人であったから、雑誌の用でなく、ただ遊びに(話をしに)来たのであった。」とあるように、鐵太郎は、浅見や中谷が逃げ出す程の宇野の話を、自ら聞きにいていたようだ。

宇野は鐵太郎の「文学的才能」を認め、芥川賞に『子の死と別れた妻』を推薦しようとした事もあった。鐵太郎にとって宇野は、作品を評価してくれる良き理解者であった。

交流のあった文士たち



なかたに たかお
中谷孝雄

明治 34(1901)年 10 月 1 日～平成 7(1995)年 9 月 7 日

小説家。三重県出身。大正 13 年東大独文科に入学、上京。翌年、「檸檬」の梶井基次郎、れのもん かじいもとじろうのむらしげると同人誌『青空』を創刊。東大を中退し雑誌社に勤務するが、経済恐慌の影響を受け、2 ヶ月で退社を余儀なくされた。

その後、敬愛する佐藤春夫に師事、『雄鶏』(後に『麒麟』と改題)などに寄稿するようになる。『麒麟』や『世紀』の同人となり、昭和 8 年 5 月、『麒麟』に「春」を発表する。「春」は川端康成によって高く評価され、作家として注目されるきっかけになった。続く「三十歳」、「春の絵巻」も世間から好評だった。享年 94 歳。

中谷は昭和 3 年から杉並和田堀町に住んでいた。翌々年、偶然にも鐵太郎が道を隔てた隣家に越して来たことで、二人の交流は始まる。殆ど毎日顔を合わせ、文学の話をするようになった。

それまで鐵太郎は、自分の作品を発表してみたいという気持ちはあったものの、自分の同人雑誌も、仲間もなかったために実現しなかった。中谷と隣り合わせになったことにより、今までなかった機会が巡ってくることになる。

中谷は、田畑修一郎らが立ち上げた『雄鶏』の創刊号に、随筆を書くことになった。そこで、鐵太郎の随筆も載せてもらえないかと、二人で田畑の元を訪ねた。田畑は、持参していた鐵太郎の随筆を読んで非常に感心し、「よい人を紹介してくれた」と喜んでいたという。こうして鐵太郎の随筆、「日光湯元にて一都の妻へー」(『文芸随想』所収)は、『雄鶏』の誌面を飾った。

中谷の作品に、「母」がある(『古木鐵太郎全集』別巻 所収)。作中に、「私」の隣人として「S さん」が登場するが、これは鐵太郎がモデルである。逆に鐵太郎の作品「子の死と別れた妻」の N、「露の世」の工藤のモデルは中谷である。

たばたしゅういちろう
田畑修一郎

明治 36(1903)年 9 月 2 日～昭和 18(1943)年 7 月 23 日

小説家。島根県生まれ。昭和 6 年、『雄鶏』(後の『麒麟』)を創刊。『雄鶏』は後に、鐵太郎を始め、中谷孝雄なかたにたかおらが加わる。『雄鶏』は田畑が基金として千円出し、編集もほとんど田畑がひとりで行っていた。創刊号はパンフレット形式の新聞紙半切の大型。浅見淵あさみふかしは「フランスの文学新聞のような洒落た雑誌」と語っている。後に普通の菊版の雑誌になった。享年 39 歳。

鐵太郎を知ったのは、随筆の原稿を中谷から受け取った時に、紹介されたからだった。持参していた随筆「日光湯元にて」の原稿を読んで感心し、『雄鶏』創刊号に掲載。どちらかと言えばハイカラ好みだった田畑だが、それとは対照的な鐵太郎の作品をいたく気に入り、彼を『雄鶏』の同人として受け入れた。

『雄鶏』が普通の版型の雑誌になった最初の号に、鐵太郎の短編「折舟」おりふねが載った。そのころ、「モダニズム」という新興芸術が盛んであって、ハイカラな小説が好まれる時代だった。鐵太郎はハイカラな小説など自分には書けそうにないと思っていた。自分なりのものを書くしかなく、『折舟』も自信があるわけではなかったという。しかし、田畑は『折舟』や『昔日』といった作品を評価した。中谷はその様子を「他の同人の誰の作品に対してよりも、感心していた」と語っている。

とのむらしげる
外村繁

明治 35(1902)年 12 月 23 日～昭和 36 年(1961)7 月 28 日

小説家。滋賀県生まれ。昭和 8 年、田畑修一郎らの立ち上げた同人雑誌『麒麟』きりんに参加。昭和 10 年、未完「草筏」くさいかだで第一回芥川賞の候補作となる。「草筏」は昭和 9 年から 13 年まで連載され完結、昭和 14 に池谷賞を受賞した。

鐵太郎とは、『麒麟』で一緒だった。共通の友人に上林暁がいる。鐵太郎と上林が酒を持

参で外村宅に押しかけてきたので、一緒に昼間から飲んだこともあった。外村は「古木さんと飲むのは久しぶりだ」と喜び、持参した酒だけでは足りなくなるほど飲んだ。古木の人柄については、「人に対しては寛容柔和な人だが、自分には厳しい」と評している。

いぶせますじ
井伏鱒二

明治 31(1898)年 2 月 15 日～平成 5(1993)年 7 月 10 日

小説家。広島県生まれ。ユーモアと哀愁を含んだ独特の作風で作家としての地位を確立した。代表作に「さざなみ軍記」、「山椒魚」、「ジョン万次郎漂流記」などがある。享年 95 歳。

文壇の大御所的存在であった井伏は、著書の中で「(前略) たばたしゅういちろう 田畑 修 一郎・てらぎひろし 寺崎 浩・なす 那須 たつぞう 辰造・おがたたかし 緒方隆士・こきてつたろう 古木鐵太郎・なかにたかお 中谷孝雄氏など(以上、身長順であるが)これ等の諸氏は『きりん麒麟』に集まって最近みんな一度に進出してしまった。」と、鐵太郎を含む『きりん麒麟』の同人を評価している。

『公論』の文芸記者となった鐵太郎は、井伏に小説欄を提供している。『公論』は、鐵太郎が辞める頃には右翼化が顕著になっていたが、鐵太郎が小説欄を提供した人々は「大声で戦争を謳わない人たちだった」(『文士の行蔵』鈴木地蔵著・平成 20 年)と後世に評価されている。

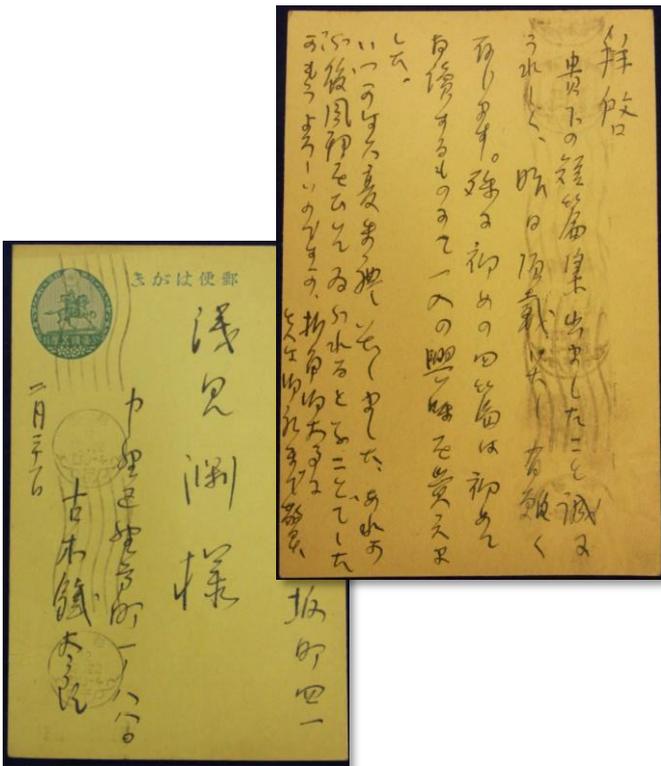
あさみふかし
浅見淵

明治 32(1899)年 6 月 24 日～昭和 48(1973)年 3 月 28 日

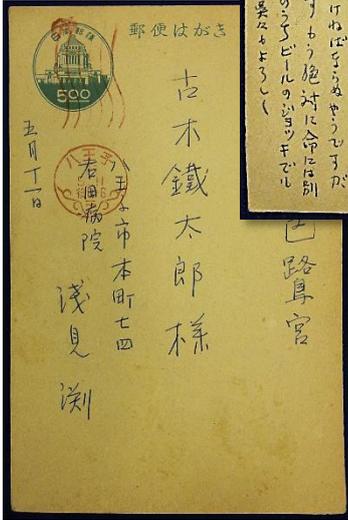
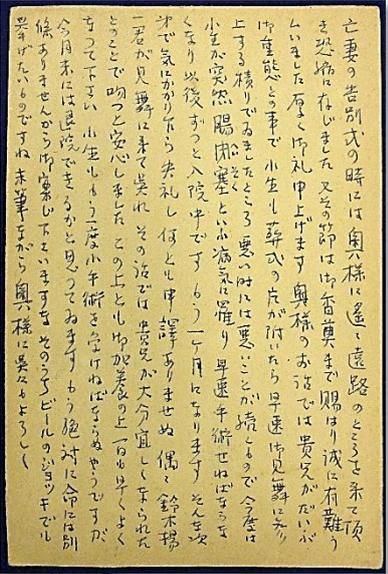
小説家・評論家。兵庫県生まれ。昭和 3 年丹羽文雄らと『にわふみお新正統派』を創刊したほか、多くの同人誌に加わる。私小説風の作品や作家論、作品論などを発表した。小説に『めざましどけい目醒時計』、『てふうきん手風琴』、評論に『昭和の作家たち』など。享年 73 歳。

浅見と鐵太郎は文学仲間であり、浅見は鐵太郎の作品を「近い将来、古木君の作品の真価

が、必ずや在るべき位置に置かれる日が到来するものと堅く信ずる」と大いに評価している。また、鐵太郎の死後、浅見に対してすゑが「中途半端な年に遺稿集を上梓するのはおかしくないだろうか」と相談をしたときに、「故人に対して今なお遺族の熱意がつついているということは、感動を与えこそすれ、誰が笑うものですか」「古木君の作品をもっと読みたいと思っている者が相当いますヨ」とも答えたという。



←鐵太郎から浅見淵宛 昭和12年
写真提供：かごしま近代文学館



→浅見淵から鐵太郎宛
写真提供：かごしま近代文学館

ほりきかつぞう
堀木克三

明治 25(1892)年 7 月 23 日～昭和 46(1971)年 8 月 12 日

大正の文芸評論家。小説『暮れゆく公園』を執筆。鐵太郎の日記に出てくる昭和 23 年頃は、上落合 1 丁目 476 番地荒木方に住んでおり、鐵太郎も何回か訪ね、自分の作品についても評を聞くなど交流があった。『人間失格』の登場人物である藤田のモデルとも言われている。にしむらけんた最近だと西村賢太『苦役列車』の中に収録されている「落ちぶれて袖に涙のふりかかる」のモチーフになっている。

なかじまなおと
中島直人

明治 42(1904)年 4 月 20 日～昭和 15(1940)年 12 月 13 日

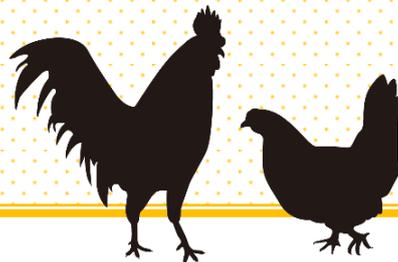
新井薬師の近くに下宿していた為に、鐵太郎とは交流があった。鐵太郎が引っ越しをする際に、中島の家には自分だけ(すゑと子供たちはすゑの兄の所に預けていた)居候していた時期がある。鐵太郎は「中島くん」という随筆の中で「今度本になってから、僕は半分ばかり読んでみた。みな楽しいものばかりだった。遠い白帆が陽炎に見え隠れする様な、楽しさと悲しさを読後の感じに受けた」と中島の著書を褒めた。中島は、幼いころに住んでいたハワイに帰りたいと願っていたので、作家仲間たちが世話を焼いた。鐵太郎の義兄である小林倉三郎が出資し、自費出版した『ハワイ物語』と、外村の工面で念願のハワイに行くことができた。現地で二世の女性と結婚、男子ももうけた。サンフランシスコ郊外の日本人学校の校長を務めたが、交通事故で死去。昭和 16 年に、未亡人と遺児を囲んで新宿の酒亭「樽平」で催された「中島直人君追悼会」に鐵太郎は参加している。他にもたにぎきせいじ あさみふかし いぶせますじ谷崎精二、浅見淵、井伏鱒二、きやましようへい とのむらしげる みやぎさとし木山捷平、外村繁、宮城聡などが参加した。

小断 文人と動物



いぶせますじ
井伏鱒二は猫が嫌いだったが、ネズミ対策のために猫を飼っていた。名前はチュン。飼えば他の家の猫よりは可愛いと、その後に迷い猫の三毛猫も飼っていた。名前は「ネコ」「うちのネコ」。井伏をまむし 蝮から救った事もあるようだ。きやましようへい 木山捷平の家にはペルシャ猫の雑種の子ネコがいたが、いなくなってしまった。「(前略) 可愛い盛りだったのに、どこへ行ったか帰ってこない。実にさびしい。隣家の主婦の話では、良い子猫はもの取りにねらわれている由」と日記に書いている。ちなみに、この子ネコの親猫は外村とのむら しげるあおやぎみずほ 繁が飼っている猫で、青柳瑞穂の飼っている猫の孫に当たる。文学士同士の猫の譲りあいがあった様だ。

鐵太郎の家ではう こっけい 烏骨鶏を飼っていた。高価な卵を産むという事と、丈夫だから飼うのに手間がかからないという事で、すゑが親戚から烏骨鶏の雄鶏をもらってきた。「容姿もよかった。他の鶏にくらべて何となく品があった」と、鐵太郎もとても大事にしていた。その後また親戚から雌鶏をもらって、卵をとっていたが、ある晩にイタチか何か雄鶏をとられてしまい、「子供を赤痢で死なせた時に近い、それに似た悲しさを味はった」と深い悲しみを味わっている。また、鐵太郎自身は犬が苦手だが、野良犬を庭に泊めていた事もある。その犬が後になって鑑札を取り、地域で飼われる犬になったのを見て、「犬の出世」と喜んでいる。



晩年の鐵太郎

鐵太郎は昭和 28(1953)年、54 歳の時、肺壞疽と診断され杉並荻窪病院に入院。『病床雜記』(『古木鐵太郎全集』3 卷所収)を記していた。日記からは、病状の変化に一喜一憂し、回復を願う様子が読み取れる。妻・すゑや三人の子供に加え、外村 繁、瀧井孝作、上林 暁らの名前も見え、鐵太郎を見舞っていたのが分かる。

鐵太郎は入院中、アッシュのステッキを欲しがったという。鐵太郎の死後、なぜステッキなのか遺族は不思議に思ったが、改造社時代の同僚だった上林には推測がついた。ボーナスの出た日、鐵太郎は上林を連れて銀座に出かけ、当時流行っていたアッシュのステッキを買った。鐵太郎はパナマに似た帽子をかぶり、ステッキを突いて、銀座の町を歩いたものだという。「元気だった時分のことが、懐かしかったに違いありません。元気になって退院したら、きっとアッシュのステッキを突いて歩くつもりだったんでしょねえ」と上林は語る。

また鐵太郎は、病床でも原稿を書き続けていた。11 月 27 日の日記に小説「初秋の旅」を書き始めたと記述がある。死後、数編の遺稿や草稿が発見された。その中には「あと一行で出来上がるんだ」と言っていたが間に合わず、あと一行のために未完に終わったものもあった。

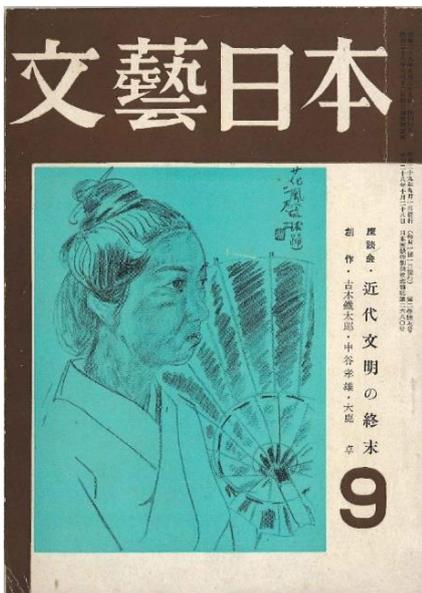
闘病中であっても物堅い鐵太郎の人柄は変わることはなかった。外村 繁が、鐵太郎の病を文学仲間知らせると、「経済的にも困っておられるようだから、生活援助の寄付金を募

集しては」という話が出た。本人に無断で話を進めるわけにはいかないと、浅見 淵が鐵太郎に知らせたところ、「親切に言われるのは、ありがたいけれども、本当は、それはしたくない」と断ったという。

亡くなる数日前の日記には「体の調子も血痰以来優れなかったが、だんだんよくなって来たようだ」と希望を見せた。しかし、昭和 29 年 2 月 21 日の日記を最後に絶筆。3 月 2

←『文藝日本』昭和 29 年 9 月号 文芸日本社
古木鐵太郎追悼号
写真提供：かごしま近代文学館

日の午後に咯血して死去した。



古木鐵太郎 年表

年代	年齢	出来事
明治 32年 (1899)	0歳	7月13日、鹿児島県宮之城村（現在のさつま町宮之城屋地）にて、父・高、母・ツルの六男として生まれる。 (兄5人、姉1人、弟1人)
36年 (1903)	4歳	2月、母・ツル産後の病のため死去（享年44歳）
39年 (1906)	7歳	3月、父・高、2度目の再婚。 4月、宮之城盈進尋常小学校入学。
45年 (1912)	13歳	4月、鹿児島県立川内中学校に入学。寄宿舎生活。
大正 6年 (1917)	18歳	3月、中学校卒業。神戸高等商業学校を受験して失敗。 6月、秋から予備校に通うため、三兄の横浜の家に寄宿する。 8月、脚気にかかって帰郷
7年 (1918)	19歳	3月、熊本高等工業学校を受験して失敗。 5月、宮之城求名(ぐみょう)尋常高等小学校に代用教員として赴任、教員住宅に入る。
8年 (1919)	20歳	4月、山本実彦が改造社を創立 総合雑誌『改造』を創刊 12月、代用教員を退職。
9年 (1920)	21歳	5月、上京。同郷の山本実彦の縁故で、三菱系商会に入社。山本家に寄宿する。 6月、本郷弓町の下宿・青葉館に移る。 11月、商会を退職。「改造」編集部に入る。
10年 (1921)	22歳	春、麴町の素人下宿に移り、友人と共同生活。 秋、小石川の下宿・旭日館に一人で移る 12月、帰郷。病弱で男子のいない長兄の後継になるよう告げられる。
11年 (1922)	23歳	谷崎潤一郎の原稿の催促に行った際、義妹の小林すゑと知り合う。

昭和	12年 (1923)	24歳	1月9日、本郷弓町の青葉館の紹介で村上のふと見合い、交際。 4月初、のふを小石川の下宿に迎えて同棲。 8月半ば、のふ流産。 8月28日、父・高死去(享年69歳) 9月1日、関東大震災
	13年 (1928)	25歳	7月初、義母の隣家にある借家に移る。 7月19日、長男夏郎誕生。 10月、のふと入籍。 11月、長兄の後継ぎになる。 12月、古木家の家督相続。
	15年 (1926)	27歳	7月、のふと大学生の浮気現場を目撃。長男を兄夫婦に預けて下戸塚の下宿に移る。 10月、離婚。 離婚後、小林すゑと再会。
	2年 (1927)	28歳	6月、入社した上林暁とともに、文学全集宣伝の文芸講演会の仕事をする。 8月、改造社を退社。
	3年 (1928)	29歳	夏郎を引き取り、小林すゑと同棲 小出版社の編集の仕事に携わる。
	4年 (1929)	30歳	(小林すゑと再婚?) 小出版社倒産。これを契機に小説に専念。 10月 世界恐慌はじまる(1933年まで)
	5年 (1930)	31歳	1月、上京して理化学研究所に勤める弟・一夫と同居。 5月、二男直輔生まれる。 12月、杉並区和田堀町に移る。中谷孝雄と知り合う。
	6年 (1931)	32歳	5月、杉並区高円寺の借家に移る。 6月、長男夏郎が赤痢で入院。 7月11日、夏郎死去(満6歳) 8月、杉並区高円寺404番地の借家に移る。
	7年 (1932)	33歳	5月、長女、薫子生まれる。 6月、高円寺から野方の借家に移る。
	9年 (1934)	35歳	5月、高円寺に移る。

10年 (1935)	36歳	2月中野区鷺宮の借家に移る。
11年 (1935)	37歳	3月、次女、瑞子生まれる。 4月、野方に移る。
13年 (1938)	39歳	芥川賞候補として声がかかる。 2月、出版記念会。 4月17日、鷺宮に移る。
15年 (1940)	41歳	古木鐵也のペンネームを使い始める。
16年 (1941)	42歳	総合雑誌『公論』編集部、小説欄を担当する。 12月、太平洋戦争開戦。
17年 (1942)	43歳	9月、『公論』の編集部を退社。
19年 (1944)	45歳	5月初、通信院(現：総務省)総務局要員課嘱託となり、 機関誌『大通信』の編集に携わる
20年 (1945)	46歳	5月、山手空襲。中野区も大きな被害を受ける。 8月、終戦。
22年 (1947)	48歳	12月、通信院嘱託を退く。
26年 (1947)	52歳	6月、借家を買取るため、帰郷して家屋敷の一部を売却。
28年 (1953)	54歳	9月、肺壞疽のため、荻窪病院に入院。
29年 (1954)		3月2日、死去。(54歳) 中谷孝雄により、追悼会「梅花忌」が行われる。
34年 (1959)		7回忌。
41年 (1966)		13回忌を中野の料亭「ほととぎす」で開催。
45年 (1970)		17回忌を中野の料亭「ほととぎす」で開催。
57年 (1982)		妻・すゑ死去。
平成 26年 (2014)		10月、さつま町役場(古木鐵太郎生家跡地)に生誕の 碑が建立。

参考資料：『古木鐵太郎全集 第3巻』

古木鐵太郎 作品年表

『古木鐵太郎全集 第3巻』年譜・初出年表より

年代	年齢	月	作品リスト
大正14年 (1925)	26歳	2月 この年	「春浅く」執筆 「初節句」執筆
昭和6年 (1931)	32歳	6月 9月 11月 12月	田畑修一郎らが『雄鶏』創刊。創刊号に「日光湯元にて一都の妻へ」を發表 『雄鶏』同人に加わる 『雄鶏』に「折舟」を發表 『雄鶏』に「昔日」を發表
昭和7年 (1932)	33歳	4月 6月 8月 10月 12月	『雄鶏』に「時子」を發表 『作品』に「葉桜」を發表 『雄鶏』終刊 『麒麟』創刊。『雄鶏』の後継誌。「ひと夏の記憶」を發表 『三田文学』に「姉弟」(改題「姉」)を發表 『小説・エッセイ』に「郊外の住ひ」發表
昭和8年 (1933)	34歳	1月 4月 10月 11月	『作品』に「ある日の散歩」を發表 『麒麟』に「子の死と別れた妻」發表 『文学界』創刊号に「其の後」發表 『文芸』に「兄の死」發表
昭和9年 (1934)	35歳	1月 2月 4月 5月 6月 9月	『文芸』に「十二月の同人雑誌」發表 「三月作品評」(掲載紙不明)發表 『世紀』創刊。創刊号に「野方にて」發表 『鶴』に「何故書くか」發表 『浪漫古典』に「子三題」發表 『世紀』に「父の夢」發表 『文芸通信』に「少年」發表 『世紀』に「魔法の山その他」 『早稲田文学』に「甘前後」發表 『九州日報』に「あちこちの秋」發表
昭和10年 (1935)	36歳	1月 2月 3月 4月 6月 8月 10月 11月 12月	『徳島毎日新聞』に「酒仙葛西善蔵氏の断片的追憶」を發表(改題「葛西善蔵」) 『世紀』に「春浅く」を發表 『世紀』に「昨日のこと」發表 『世紀』終刊号に「一つの感想」發表 『徳島毎日新聞』に「都会と田舎」發表 『作品』に「ある男の話」發表 『木靴』創刊。創刊号に「最近読んだものから」發表 『木靴』に「一瓢」を發表 『中外商業新報』に「晩秋郊外」發表 『芸術科』に「メダカ」發表 『木靴』に「無題」を發表(改題「菊を焚く」)

年代	年齢	月	作品リスト
昭和11年 (1936)	37歳	1月	『木靴』に「思ひ出」発表 『文芸通信』に「遊んでゐる」発表 『若草』に「お藤さん」発表
		2月	『木靴』終刊号に「感想」発表 『時事新報』に「文学随想」を発表
		3月	『文芸雑誌』に「歌の調子」を発表
		4月	『文芸』に「葛西善蔵のこと」（改題「仲秋」）発表
		5月	『時事新報』に「武蔵野の初夏」発表
		6月	『文学生活』創刊。創刊号に「ある随想」を発表（改題「武者小路実篤」） 『芸術科』に「四月七日の日記」発表 『中外商業新報』に「わが家の野良犬」を発表
		7月	『福岡日日新聞』に「犬嫌いの随筆」を発表
		8月	『文学生活』に「呑気な感想」を発表
		9月	『蠟人形』に「橋の上」発表 『文学生活』に「わが窓辺にて」発表
		10月	『文学生活』に「T先生」「小田さん」を発表 『若草』に「鬼あざみ」を発表
		11月	『信濃毎日新聞』に「路上」を発表 『文学生活』に「郁子」を発表
		12月	『中外商業新報』に「烏瓜をもらふ」を発表（改題「烏瓜」） 『時事新報』に「作家の感想」を発表
		この年	「父の日記帳」「馬の記憶」「秋風！ 故郷の山川」を発表（掲載紙不明）
昭和12年 (1937)	38歳	1月	『文学生活』に「六号雑記」を発表
		2月	『文学生活』に「新春随想」「中島くん」を発表 『文芸汎論』に「あの頃のこと」を発表
		3月	『文芸懇話会』に「みのうへ」を発表
		4月	『文学生活』に「早春」を発表
		5月	『中外商業新報』に「就学児童」を発表
		6月	『文学生活』（終刊）に「文学日記」を発表 『国民新聞』に「初夏散策」を発表
		8月	『福岡日日新聞』に「宇野浩二を語る」発表
		11月	『文芸汎論』に「機縁」を発表
		この年	「病院のある風景」「犬の出世」発表（掲載紙不明）
昭和13年 (1938)	39歳	1月	『海運』に「わが川の記」発表 『九州日報』に「特務兵の初便り」を発表
		4月	『海運』に「霧島と桜島」を発表（改題「山の音」） 『大法輪』に童話「戦はずに勝った王様」発表
		5月	『作品』に「武蔵野の新春」を発表 『早稲田文学』に「回想断片」を発表
		6月	『海運』に「初夏の武蔵野風景」を発表（改題「初夏夕景」）
		8月	『大法輪』に童話「命の恩人」発表
		9月	『国民新聞』に「武蔵野の秋色」発表
		11月	『子の死と別れた妻』（赤塚書房）刊行
		この年	「夏の宵」「夕月」を発表（掲載紙不明）

年代	年齢	月	作品リスト
昭和14年 (1939)	40歳	1月	『早稲田文学』に「葛西さんのこと」を發表 『子の死と別れた妻』が、昭和13年下半期(第8回)芥川賞候補 に名前があがる
		2月	『短歌研究』に「南国情緒」を發表 「『子の死と別れた妻』出版記念会」井上良雄宅にて
		3月	『作品』に「はがき」を發表(改題「消息」)
		4月	『月刊文章』に「烏骨鶏」を發表 『大法輪』に童話「とんねる」發表
		5月	『国民新聞』に「文芸随想」發表 『高知新聞』に「作家の印象記」を發表
		6月	『短歌研究』に「春の日」を發表
		11月	『オール女性』に「若い頃」を發表
		12月	『現代作家印象記』(上林暁と共著,赤塚書房)を刊行
		この年	「或る特務兵の話」「鷺宮」「アンドレ・ジッドの魅力」を發表(掲載紙不明)
昭和15年 (1940)	41歳	1月	『作品』に「或る母の手紙」を發表 『作家』に「庭の便り」を發表
		3月	『文学界』に「露の世」を發表 『作家』に「夏の作家二人」を發表
		5月	『月刊文章』に「横光利一氏の文章」を發表 これより、今東光命名のペンネーム「鐵也」を用いる
		6月	『国民新聞』に「子を描く」を發表(改題「路傍の花」)
		12月	『公論』に「かまど」を發表(改題「石の竈」) 『詩原』に「黄菊」を發表
		この年	「春の小川」(改題「春の風聞」)「出征兵の子」を發表(掲載紙不明)
昭和16年 (1941)	42歳	2月	『日本の風俗』に「南国のお正月」を發表
		3月	『日本評論』に「雲」を發表 『若草』に「島の家」を發表
		4月	『文学通信』に「秋怨記」(「秋怨の記」)を發表
		5月	『日本の風俗』に「秋雨」を發表
		8月	『海運』に「田園随想」を發表 『月刊文章』に「林の中で」を發表
		10月	『意匠』に「強雨寸景」を發表
		11月	『月刊文章』に「わが島の記」を發表
		12月	『文芸日本』に「松風」を發表
		この年	刊行予定の創作集が出版元の事情で中止になる
昭和17年 (1942)	43歳	3月	『月刊文章』に「去年の秋から」を發表(改題「秋から冬へ」)
		4月	『月刊文章』に「続・去年の秋から」を發表(改題「作家を訪ねて」)
		8月	『理想日本』に「山桜」を發表
昭和18年 (1943)	44歳	1月	『令女界』に「落葉」を發表
		2月	『月刊文章』に「山の花」を發表
		7月	『辻小説集』に「海軍魂」を發表
		9月	『馬事日本』に「散歩に出て馬を見るの記」を發表

年代	年齢	月	作品リスト
昭和19年 (1944)	45歳	4月	小学館刊『昭和文学作家論』上巻に「瀧井耕作論」を發表
昭和22年 (1947)	48歳	2月	『東国』に「ふるさとの山、ふるさとの川」を發表
		9月	『素直』に「春園」を發表 これよりペンネーム「鐵太郎」に戻る
		11月	『不同調』に「巨匠の言葉」を發表
昭和23年 (1948)	49歳	7月	『不同調』に「野花」を發表
		11月	『不同調』に「愚かな父」を發表
昭和24年 (1949)	50歳	9月	『文学集団』に「武者小路実篤氏」を發表
昭和27年 (1952)	53歳	3月	『早稲田文学』に、「紅いノート」發表
昭和28年 (1953)	54歳	5月頃	体調すぐれず。肺炎・肋膜炎で自宅療養
		9月	『心』に「手賀沼～志賀さんのこと～」を發表
		9月10日	肺壞疽で杉並荻窪病院に入院。「病床雜記」を記す
昭和29年 (1954)		3月2日	没。
		9月	『文芸日本』1954年9月号 特集 古木鐵太郎追悼、「風塵日記」發表
昭和31年 (1956)		2月	『心』に「昔の人」發表
昭和32年 (1957)		5月	『素直』に「吹きぶり」發表
昭和34年 (1959)		11月10日	『赤いノート』を校倉書房より出版
		11月11日	『赤いノート』出版記念会
昭和41年 (1966)		3月	創作集『折舟』を校倉書房より出版
		11月	隨筆集『大正の作家』を桜楓社より出版
昭和47年 (1972)		3月15日	『葉桜』を皆美社より出版
昭和48年 (1973)		3月	『ポリタイア』に「訪問の旅」を發表
昭和52年 (1977)		4月30日	『母と子の古典・今昔物語』を白川書院より出版
昭和57年 (1982)		9月15日	創作集『仲秋』を私家版で出版
		10月12日	隨筆集『文芸隨想』を私家版で出版
昭和63年 (1988)		5月30日	『古木鐵太郎全集』三巻を、古木鐵太郎刊行会より出版

展示風景



一般開架特設コーナー全景

正面玄関前ガラスケース

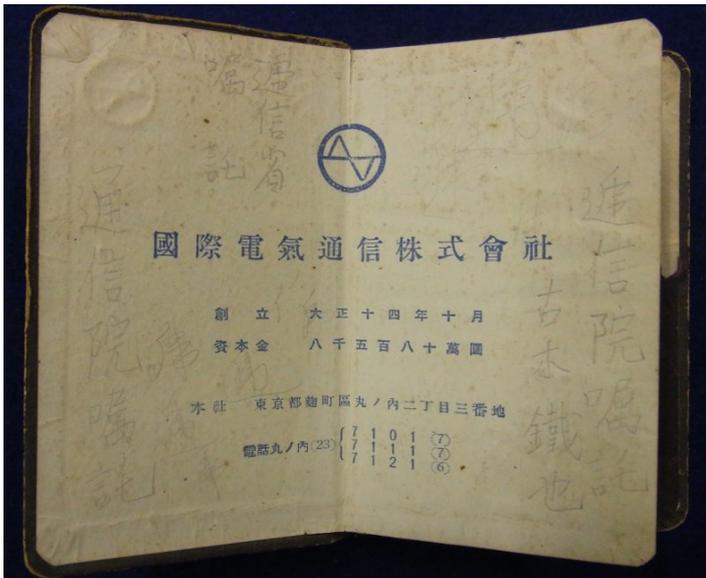
展示横平面ガラスケース



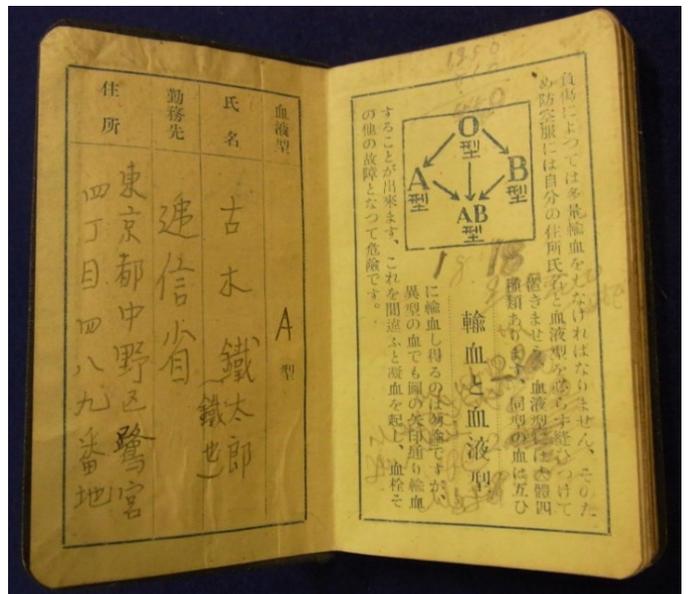
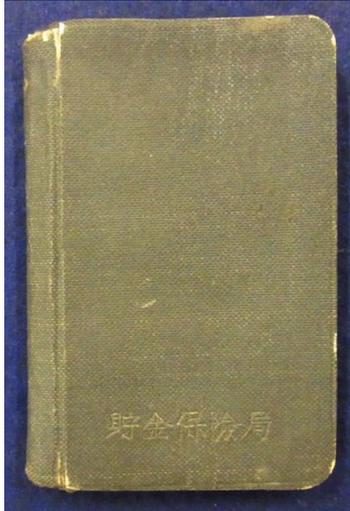
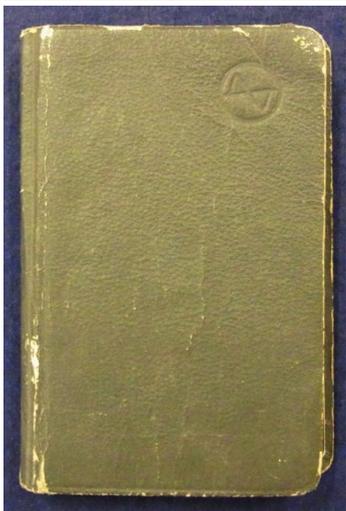
展示写真



↑鐵太郎愛用の筆立て
写真提供：さつま町宮之城歴史資料センター



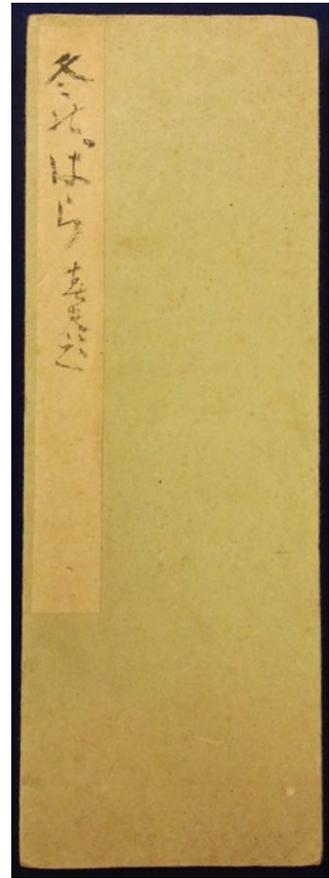
←手帳（通信院囑託時代）
写真提供：かごしま文学館



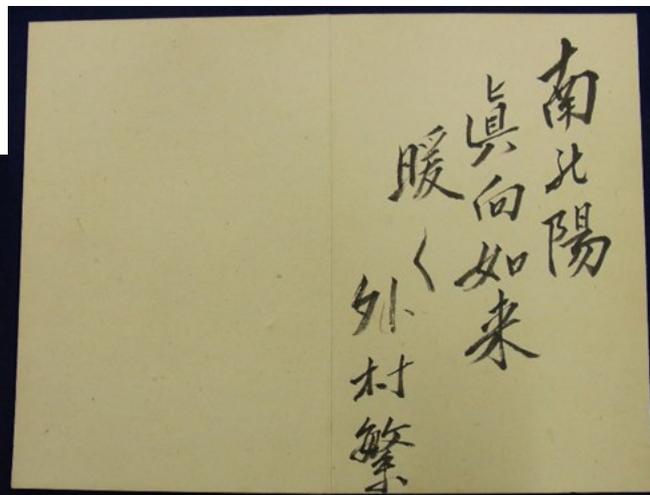
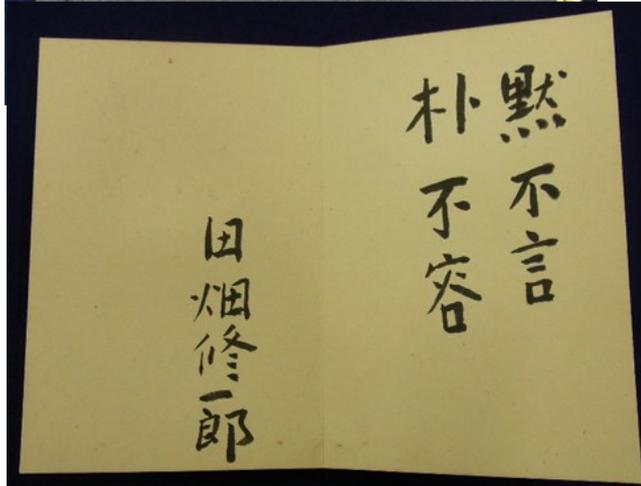
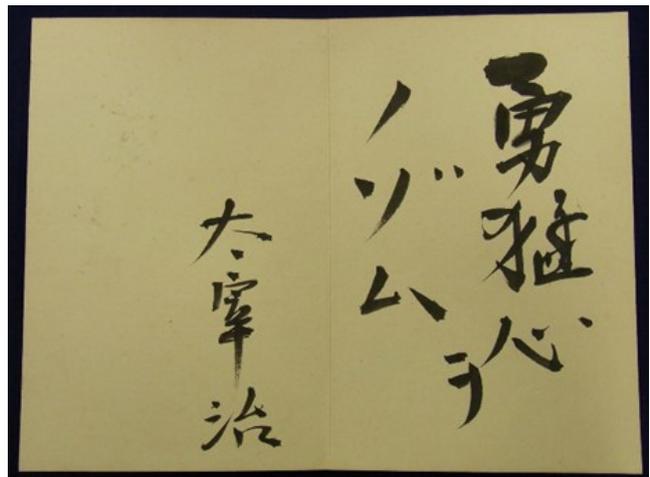
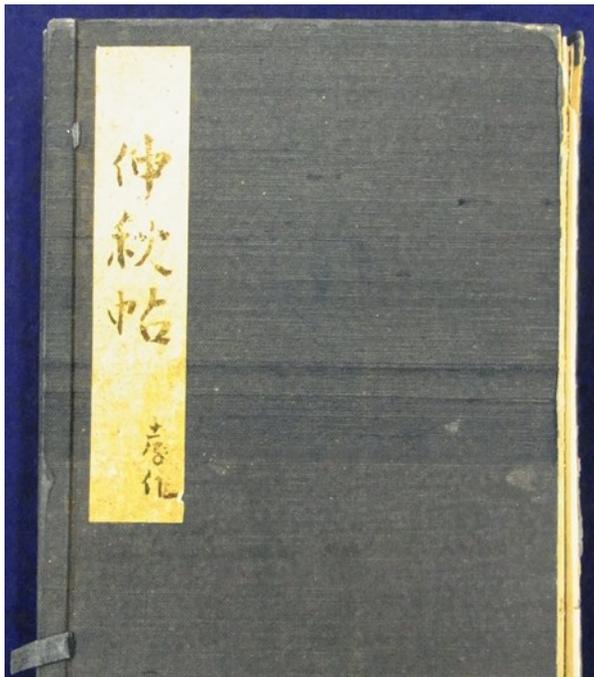


↑ 牧野吉晴

↑ 外村繁



→ 追悼寄書集「冬のぼら」 井伏鱒二ら26人による寄せ書き
写真提供：かごしま近代文学館



「仲秋帖」(公論社退社慰労会の寄書)

写真提供：かごしま近代文学館

紅いノート

古木 鐵太郎

或る人達が自分「悪意」を持ってゐる——と、
 こう時々思つたりするやうなやつたのは、
 う一年前から前からたらうか。それは私
 とつて一寸淋しい氣のすることだつた。その
 原因は何か？ 氣はいる／＼考へてみるのだが、
 けつきりとその原因を思ひつくことは出来な
 い。自分は人よきはれる性質を持ってゐる
 のかも知れない。さう云へば、自分よはる分
 の憂念とこころもあるやうだ。また、拙いこと
 などもよくやつてゐる。それは自分でも分つ
 てゐるのだが、薄志弱行とでも云ふのか、や
 ることなすこと失敗だらけを重ねてゐる始末
 である。葛西善藏といふ作家は生前よく書
 てるたものだ。榮える人には確かにそれだけ
 のものが備つてゐる。榮えない者にはやはり
 それだけのものが無いからだと。自分の場合

←原稿『紅いノート』
 写真提供：かごしま近代文学館

春の舗道

古木 鐵太郎

ある春の午後だつた。私は友達つ川原と上
 野原の路の通りを歩いてゐた。私は二人と
 も今年の花見もせずじまひたつた。今日
 9日曜日と久しぶりよに新公園に来て、花見
 是今の名残りを味はつたのたつた。公園は一
 杯の人出だつた。私は公園の中を少し歩き
 廻つてから博物館に入り、一廻りして出て来
 たのたつた。
 日曜のこととて通りも賑かたつた。私は可
 なり疲れても来たり、敵すことも無くたつて
 しまつた。すると益々歩いてゐる川原が突
 然、叱咤した風さうななり私の背後を廻り
 のと思ふと、ソヤとどぎまぎしなから車道の
 外れで行つた。私はまよひを思ひながら、こ
 う時反的のまづかか人々を見廻した。親
 多五人連れの夫婦が、いま通つて行くところだ。親
 男は四十位の勤人らしい、首振、女の顔はもう

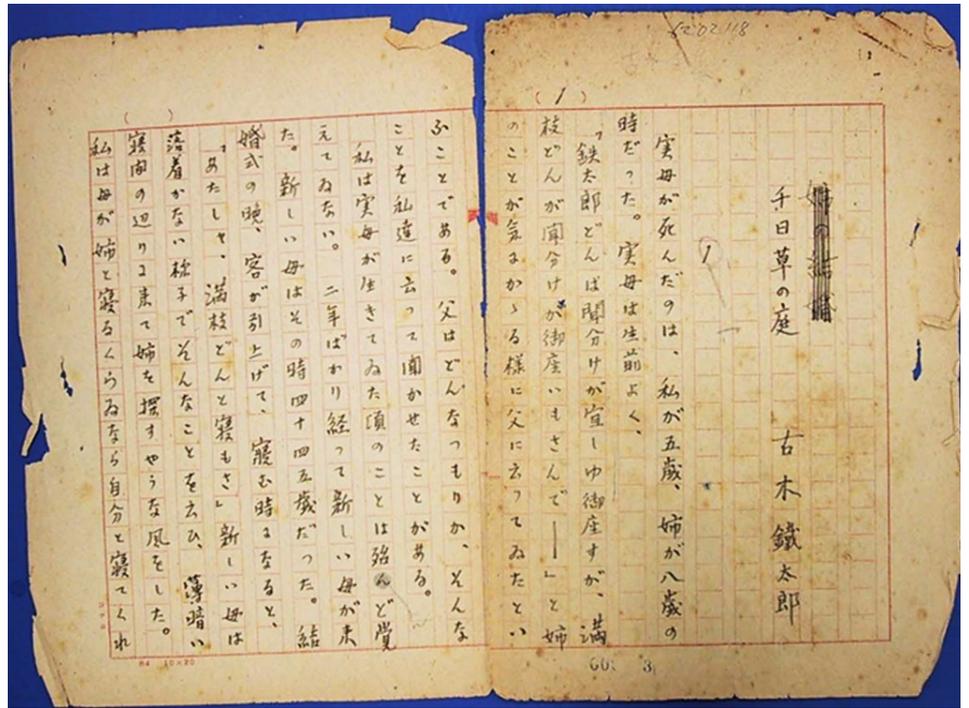
原稿「春の舗道」
 写真提供：かごしま近代文学館

山上の寺にて

古木 鐵太郎

一昨日の正午ごろ私はこの寺に着いた。
 了度、在所の新井さんが、この寺を甲子が
 らといふので、一編に達して居てもうたつたの
 だ。私は新井さんとは今交りあつたが、
 事は新井さんの奥さんといふ祝言のし、最近、
 私はこの寺のことを一寸友人からも聞いてゐ
 ない、暫く懇談さつたりして、旅行をしてい
 る、あつてゐる瓦々ころなうて、誠々懇談を
 した。
 電車を下りて、バスで約十分、登山かう山
 路のたつて、山上までは一星ばかりの行燈
 だか、又つ半分程まで坂道も段々ゆるや
 かに。私は法を説き、枯木の堤はつ
 ついて、新井さん、おはる格別の感じがあ
 ると、新井さん、おはる。

原稿「山上の寺にて」
 写真提供：かごしま近代文学館



千日草の庭

古木 鐵太郎

実母が死んだりは、私が五歳、姉が八歳の時だ。実母は生前よく、

鉄太郎とんは聞分けが深しゆ御座すが、其時枝とんが聞分けが御座はもさんで——と姉のことがなにかうる様に父に云つてみたといふことである。父はとんなつもりか、とんなことを私達に云つて聞かせたことがある。

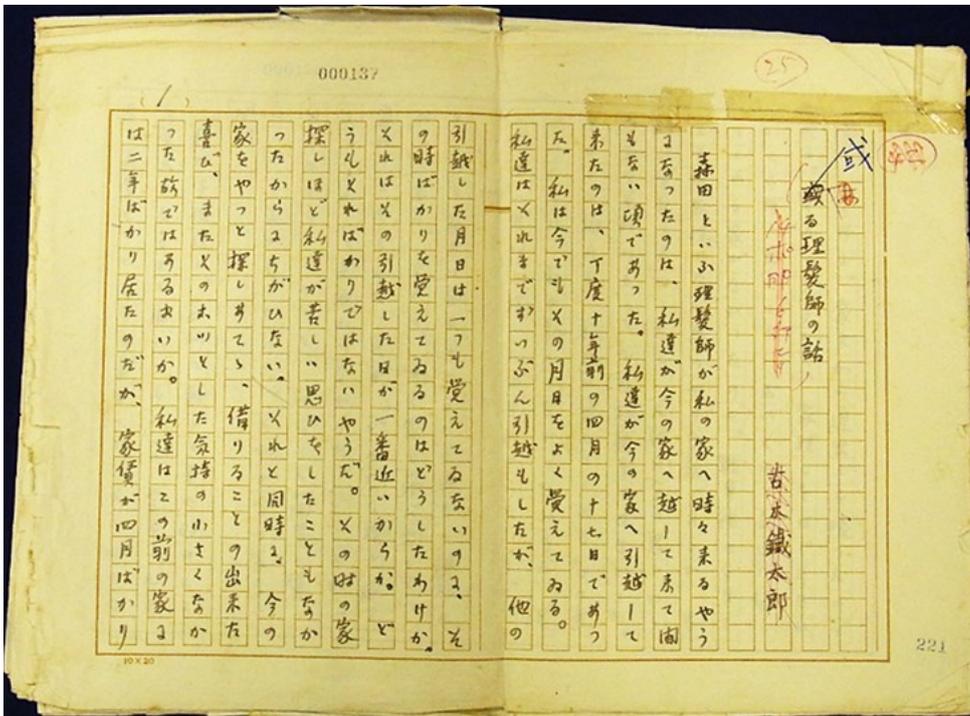
私は実母が居きてみた頃のことには殆ど覚えてゐない。二年ばかり経つて新しい母が来た。新しい母は其の時四十四五歳だった。結婚式の晩、客が引上げて、寢る時をると、

またしや、満枝とんと寝もさし、新しい母は着るがな、様子でとんなことを云ひ、薄暗い寝間の回りまわつて姉を探さやうな風をした。

私はお姉と寝るくらゐを自分と寝てく水

原稿「千日草の庭」

写真提供：かごしま近代文学館



或る理髪師の話

古木 鐵太郎

藤田といふ理髪師が私の家へ時々来るやうになつたりは、私達か今の家へ越して来て間もない頃であつた。私達か今の家へ引越して来たのは、丁度十年前の四月の十七日であつた。私は今でもその月日をよく覚えてゐる。

私達は又此までおのふん引越して来た、他の引越した月日は一つも覚えてゐないやうな、その時はかり覚えてゐるのほどうしたあけが又此は又の引越した日が一着近いかうか、どうして又此は又の引越してはないうん。又の時の家を探しほど私達が苦しと思ひをしたこともなかつたから、又水と同時、今の家をやらつと探さして、借りることに出来た喜び、また又の太川とした気持の小さくなかつた跡ではあるまいか。私達はこつ前の家は二年ばかり居たりをか、家賃が四月ばかり

原稿「或る理髪師の話」

写真提供：かごしま近代文学館

関係資料リスト（区内図書館所蔵資料）

展示	タイトル	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
古木鐵太郎							
★	古木鐵太郎全集 1	古木 鐵太郎/著	古木鐵太郎全集刊行会	1988	ゆかり/918.68/コキ/1	一般参考	禁帯
★	古木鐵太郎全集 2	古木 鐵太郎/著	古木鐵太郎全集刊行会	1988	ゆかり/918.68/コキ/2	一般参考	禁帯
★	古木鐵太郎全集 3	古木 鐵太郎/著	古木鐵太郎全集刊行会	1988	ゆかり/918.68/コキ/3	一般参考	禁帯
★	古木鐵太郎全集 別巻	古木 鐵太郎/著	古木鐵太郎全集刊行会	1992	ゆかり/918.68/コキ/B	一般参考	禁帯
★	新薩摩学 7 鹿児島近代文学・散文編	鹿児島純心女子大学国際文化研究センター/編	南方新社	2009	ゆかり/910.26/シ	一般参考	禁帯
★	紅いノート	古木 鐵太郎/著	白川書院	2005	ゆかり/913.6/コ	一般参考	禁帯
★	仲秋	古木 鐵太郎/著	古木春哉/発行	1982	ゆかり/913.6/コ	一般閉架	禁帯
★	文芸随想	古木 鐵太郎/著	古木春哉/発行	1982	ゆかり/914.6/コ	一般参考	禁帯
★	今昔物語 母と子の古典	古木 鐵太郎/訳・著 こき かおる/編	白川書院	1977	913/コ	児童閉架	
★	葉桜	古木 鐵太郎/著	皆美社	1972	ゆかり/913.6/コ	一般閉架	禁帯
★	現代日本文学大系 48		筑摩書房	1972	918.6/ゲ/48	一般閉架	
★	大正の作家	古木 鐵太郎/著	桜楓社	1967	ゆかり/910.26/コ	一般参考	禁帯
★	折舟	古木 鐵太郎/著	校倉書房	1966	ゆかり/913.6/コ	一般参考	禁帯
★	近代日本文学研究 昭和文学作家論 上巻	佐藤 春夫/編	小学館	1943	貴重書B/910.26/キ/3-	一般閉架	禁帯
★	季刊文科 32号	秋山 駿/編集委員	鳥影社	2005	ゆかり/910.5/キ/32	一般参考	禁帯
★	文士の行蔵	鈴木 地蔵/著	右文書院	2008	ゆかり/910.26/ス	一般参考	禁帯
★	市井作家列伝	鈴木 地蔵/著	右文書院	2005	ゆかり/910.26/ス	一般参考	禁帯

展示	タイトル	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	------	-----	-----	-----	------	----	----

古木春哉

★	わびしい来歴	古木 春哉/著	白川書院	1976	ゆかり/910.26/コ	一般参考	禁帯
★	保田與重郎の維新文学	古木 春哉/著	白河書院	2005	ゆかり/910.26/コ	一般参考	禁帯

古木かおる

★	花の小径	こき かほる/著	小学館	2004	ゆかり/470.4/コ	一般参考	禁帯
★	染め草の散歩道	こき かほる/著	山と溪谷社	1997	ゆかり/753.8/コ	一般参考	禁帯
★	絵が描ける子描けない子	こき かおる/著	サイマル出版	1980	375.7/コ	一般閉架	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

佐藤春夫

★	小説智恵子抄	佐藤 春夫/著	日本図書センター	2000	913.6/サト/	一般	
★	佐藤春夫詩集	佐藤 春夫/著	小沢書店	1997	911.56/サ/	一般	
★	新潮日本文学アルバム 59		新潮社	1997	910.26/シ/59	一般	
★	作家の自伝 佐藤春夫	佐伯 彰一/監修	日本図書センター	1994	910.268/サト	一般	
★	晶子曼陀羅	佐藤 春夫/著	講談社	1993	文庫/913.6/サト	一般 閉架	
★	日本幻想文学集成 11	佐藤 春夫/著	国書刊行会	1992	918.6/ニ/11	一般	
★	美しき町・西班牙犬の家	佐藤 春夫/著	岩波書店	1992	文庫/913.6/サト	一般 閉架	
★	都会の憂鬱	佐藤 春夫/著	岩波書店	1987	文庫/913.6/サト/	一般 閉架	
★	都会の憂鬱	佐藤 春夫/著	福武書店	1983	913.6/サト	一般 閉架	
★	新潮日本文学 12	佐藤 春夫/著	新潮社	1981	918.6/シ/12	一般	
★	田園の憂鬱	佐藤 春夫/著	岩波書店	1981	文庫/913.6/サト	一般 閉架	
★	日本の文学 31	佐藤 春夫/著	中央公論社	1979	918.6/ニ/31	一般	
★	日本の詩歌 16	佐藤 春夫/著	中央公論社	1979	911.0/ニ/16	一般	
★	名著複刻日本児童文学館 第1集[21]	佐藤 春夫/著	ほるぷ出版	1978	918.6/メ/21	一般	
★	小説 永井荷風伝	佐藤 春夫/著	新潮社	1960	913.6/サト	一般 閉架	
★	日本の風景	佐藤 春夫/著	新潮社	1959	915.6/サト	一般 閉架	

谷崎潤一郎

★	谷崎潤一郎対談集 芸能編	谷崎 潤一郎/著	中央公論社	2014	914.6/タニ	一般	
★	猫は神様の贈り物 エッセイ編	山本 容朗/編	有楽出版社	2014	918.6/ネ	一般	
★	夢喰う虫 改版	谷崎 潤一郎/著	新潮社	2012	文庫/913.6/タニ	一般	
★	谷崎先生の書簡 増補改訂版	谷崎 潤一郎/著	中央公論社	2008	915.6/タニ	一般	
★	谷崎潤一郎 1886-1965	谷崎 潤一郎/著	筑摩書房	2008	文庫/913.6/タニ	一般	
★	痴人の愛 改版	谷崎 潤一郎/著	新潮社	2006	文庫/913.6/タニ	一般 閉架	
★	谷崎潤一郎 上海交遊記	谷崎 潤一郎/著	みすず書房	2004	915.6/タニ	一般	
★	潤一郎ラビリンス 1	谷崎 潤一郎/著	中央公論社	1998	文庫/913.6/タニ/1	一般 閉架	
★	潤一郎訳 源氏物語 巻1	谷崎 潤一郎/著	中央公論社	1991	文庫/913.36/ム/1	一般	
★	新潮日本文学アルバム 7		新潮社	1985	910.26/シ/7	一般	
★	谷崎潤一郎 随筆集	谷崎 潤一郎/著	岩波書店	1985	文庫/910.2/タ	一般 閉架	
★	現代日本文学大系 31		筑摩書房	1980	918.6/ゲ/31	一般 閉架	
★	資料 谷崎潤一郎	谷崎 潤一郎/著	桜楓社	1980	910.268/タニ	一般 閉架	
★	谷崎潤一郎全集 第1巻	谷崎 潤一郎/著	中央公論社	1974	全集/918.68/タニ/1	一般	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

山本実彦

★	改造社のメディア戦略	庄司 達也/編	双文社出版	2013	023.0/カ	一般	
★	光芒の大正	改造社関係資料研究会/編	思文閣出版	2009	051.3/コ	一般	
★	若き高杉一郎 改造社の時代	太田 哲男/著	未来社	2008	910.268/タカ	一般	
★	新薩摩学 5 雑誌『改造』とその周辺	鹿児島純心女子大国際文化研究センター/編	南方新社	2007	051.3/シ	一般	
★	改造社と山本実彦	松原 一枝/著	南方新社	2000	289.1/ヤ	一般	
★	支那	山本 実彦/著	改造社	1936	貴B/292.9/ヤ	一般 閉架	禁帯
★	蒙古	山本 実彦/著	改造社	1935	貴B/292.2/ヤ	一般 閉架	禁帯
★	小閉集	山本 実彦/著	改造社	1934	貴B/914.6/ヤマ	一般 閉架	禁帯

武者小路実篤

★	愛と死 改版	武者小路実篤/著	新潮社	2012	文庫/913.6/ムシ	一般 閉架	
★	友情 改版	武者小路実篤/著	新潮社	2003	文庫/913.6/ムシ	一般	
★	武者小路実篤詩集	武者小路実篤/著	角川書店	1999	文庫/911.56/ム	一般	
★	作家の自伝 7	佐伯彰一/監修	日本図書センター	1994	910.268/ムシ	一般	
★	多摩の文学散歩	佐々木和子/著	けやき出版	1993	910.2/サ	一般	
★	武者小路実篤全集 第1巻	武者小路実篤/著	小学館	1987	書架/918.68/ムシ1	一般	
★	武者小路実篤画文集 1	武者小路実篤/著	福武書店	1985	大型/720.8/Mu/841	一般 閉架	
★	新潮日本文学アルバム 10		新潮社	1984	910.26/シ/10	一般	
★	ほくろの呼鈴 父 実篤回想	武者小路辰子/著	筑摩書房	1983	910.26/ム	一般 閉架	
★	自在なる生	武者小路実篤/著	大和出版	1980	914.6/ムシ	一般 閉架	
★	若き日の思い出	武者小路実篤/著	新潮社	1979	文庫/913.6/ムシ	一般 閉架	
★	武者小路実篤論 「新しき村」まで	大津山国夫/著	東京大学出版	1974	910.268/ムシ	一般 閉架	
★	実篤人生論 1	武者小路実篤/著	芳賀書店	1967	918.68/ムサ/1	一般 閉架	
★	或る男 上	武者小路実篤/著	新潮社	1966	文庫/913.6/ムシ/1	一般 閉架	
★	或る男 下	武者小路実篤/著	新潮社	1966	文庫/913.6/ムシ/2	一般 閉架	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

志賀直哉

★	志賀直哉宛書簡集 白樺の時代	日本近代文学館/編	岩波書店	2008	910.268/シガ	一般	
★	暗夜行路 前編	志賀 直哉/著	岩波書店	2004	文庫/913.6/シガ1	一般	
★	暗夜行路 後篇	志賀 直哉/著	岩波書店	2004	文庫/913.6/シガ2	一般	
★	小僧の神様	志賀 直哉/著	岩波書店	2002	文庫/914.6/シガ	一般 閉架	
★	志賀直哉の動物随想	志賀 直哉/著	新講社	1998	914.6/シガ	一般	
★	志賀直哉交友録	志賀 直哉/著	講談社	1998	文庫/910.26/シ	一般 閉架	
★	作家の自伝 28	佐伯 彰一/監修	日本図書センター	1995	910.268/シガ	一般	
★	ちくま日本文学全集 043	志賀 直哉/著	筑摩書房	1992	文庫/918.6/チ/43	一般 閉架	
★	志賀直哉短篇集	志賀 直哉/著	岩波書店	1989	913.6/シガ	一般	
★	小僧の神様・和解	志賀 直哉/著	金の星社	1983	913/シ	児童 閉架	
★	和解	志賀 直哉/著	新潮社	1981	文庫/913.6/シガ	一般 閉架	
★	清兵衛と瓢箪	志賀 直哉/著	ポプラ社	1981	文庫/913/シ	一般 閉架	
★	大津順吉・和解・ある男、その姉の死	志賀 直哉/著	岩波書店	1978	文庫/913.6/シガ	一般 閉架	
★	清兵衛と瓢箪・網走まで	志賀 直哉/著	新潮社	1976	文庫/913.6/シガ	一般 閉架	
★	雪の遠足	志賀 直哉/著	集英社	1971	913/シ	児童 閉架	

葛西善蔵

★	贗物・父の葬式	葛西 善蔵/著	講談社	2012	文庫913.6/カサ	一般	
★	作家の自伝 64	佐伯 彰一/監修	日本図書センター	1998	910.268/カサ	一般	
★	日本の名随筆 別巻65		作品社	1996	914.68/ニ/B-65	一般	
★	近代日本の短編小説	阿部 到/編	近代文芸社	1992	913.68/キ	一般	
★	人間みな病気	日本ペンクラブ/編	福武書店	1991	文庫913.68/ニ	一般 閉架	
★	子をつれて	葛西 善蔵/著	岩波書店	1987	文庫913.6/カサ	一般 閉架	
★	近代日本文芸読本 第4集	芥川 竜之介/編	日本図書センター	1981	918.6/キ/4	一般 閉架	
★	日本の文学 33	谷崎 潤一郎/[ほか] 編	中央公論社	1979	918.6/ニ/33	一般	
★	椎の若葉・湖畔手記	葛西 善蔵/著	旺文社	1977	文庫913.6/カサ	一般 閉架	
★	現代日本文学大系 49		筑摩書房	1973	918.6/ゲ/49	一般 閉架	
★	日本短篇文学全集 28	臼井 吉見/責任編集	筑摩書房	1970	913/ニ/28	一般 閉架	
★	日本文学全集 28		新潮社	1967	918.6/ニ/28	一般 閉架	
★	現代文学大系 29		筑摩書房	1967	918.6/ゲ/29	一般 閉架	
★	日本現代文学全集 45	伊藤 整/[ほか]編集	講談社	1965	918.6/ニ/45	一般 閉架	
★	葛西善蔵と芥川竜之介	塚越 和夫/著	葦真文社	1987	910.268/カサ	一般	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

瀧井孝作

★	作家の自伝 88 瀧井孝作	佐伯 彰一/監修	日本図書センター	1999	910.268/タキ	一般 閉架	
★	松島秋色	瀧井 孝作/著	講談社	1999	文庫/913.6/タキ	一般 閉架	
★	一生の春 父・瀧井孝作	小町谷 新子/著	蝸牛社	1990	910.268/タキ	一般 閉架	
★	昭和文学全集 7	井上 靖/編集委員	小学館	1989	918.6/シ/7	一般 閉架	
★	無限抱擁	瀧井 孝作/著	中央公論社	1985	913.6/タキ	一般 閉架	
★	定本 瀧井孝作全句集	瀧井 孝作/著	中央公論社	1985	911.36/タ	一般	
★	俳人仲間	瀧井 孝作/著	新潮社	1980	911.36/タ	一般 閉架	
★	瀧井孝作全集 第1巻	瀧井 孝作/著	中央公論社	1978	全集/918.68/タキ/1	一般 閉架	
★	かのこ百合 自選随筆集	瀧井 孝作/著	大和書房	1975	914.6/タキ	一般 閉架	
★	志賀さんの生活など 随筆集	瀧井 孝作/著	新潮社	1974	914.6/タキ	一般 閉架	
★	文学に見る日本の川 多摩川	瀧井 孝作/編	日本週報社	1960	915.6/タキ	一般 閉架	
★	日本の風土記 大和路	瀧井 孝作/編	宝文館	1959	291.08/ニ/12	一般 閉架	

上林暁

★	故郷の本箱 上林暁傑作随筆集	上林暁/著	夏葉社	2012	914.6/カン	一般	
★	ツェッペリン飛行船と黙想	上林暁/著	幻戯書房	2012	918.68/カン	一般	
★	星を撒いた街 上林暁傑作小説集	上林暁/著	夏葉社	2011	913.6/カン	一般	
★	戦後占領期短篇小説コレクション 4	紅野謙介/責任編集	藤原書店	2007	913.68/セ/4	一般	
★	戦後短篇小説再発見 14	講談社文芸文庫/編	講談社	2003	文庫/913.68/セ/14	一般	
	古本漁りの魅惑	高橋輝次/編著	東京書籍	2000	024.8/タ	一般	
★	白い屋形船・ブロンズの首	上林暁/著	講談社	1999	文庫/913.6/カン	一般 閉架	
★	川端康成文学賞全作品 1		新潮社	1999	913.68/カ/1	一般	
★	半ドンの記憶	上林暁/著	集英社	1981	913.6/カン	一般 閉架	
★	文学 1981	日本文芸家協会/編	講談社	1981	913.68/ブ	一般 閉架	
★	現代短篇名作選 9	日本文芸家協会/編	講談社	1980	文庫/913.68/ゲ/9	一般 閉架	
★	幸徳秋水の甥 随筆集	上林暁/著	新潮社	1975	914.6/カン	一般 閉架	
★	10冊の本 7	井上靖/編	主婦の友社	1969	081/イ/7	一般 閉架	
★	日本の風土記 4	上林暁/編	宝文館	1958	291.08/ニ/4	一般 閉架	
	現代紀行文学全集 第5巻		修道社	1958	保存/915.6/ゲ/5	一般	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

芥川龍之介

★	戯作三昧・一塊の土	芥川 竜之介/著	新潮社	2011	文庫/913.6/アク	一般	
★	芥川竜之介の書画	芥川 竜之介/書	二玄社	2009	728.2/ア	一般 閉架	
★	芥川竜之介短篇集	芥川 竜之介/著	新潮社	2007	913.6/アク	一般 閉架	
★	芥川竜之介	芥川 竜之介/著	筑摩書房	2007	文庫/913.6/アク	一般	
★	魔術	芥川 竜之介/作	偕成社	2005	YA/726.6/ア	一般	
★	侏儒の言葉・文芸的な、余りに文芸的な	芥川 竜之介/著	岩波書店	2003	文庫/917/ア	一般	
★	上海游記・江南游記	芥川 竜之介/著	講談社	2001	文庫/915.6/アク	一般 閉架	
★	作家の自伝 31	佐伯 彰一/監修	日本図書センター	1995	910.268/アク	一般	
★	トロツコ	芥川 竜之介/著	偕成社	1993	E/ミヤ	児童 閉架	
★	芥川竜之介の手紙	芥川 竜之介/著	大修館書店	1992	910.268/アク	一般 閉架	
★	鼻・杜子春	芥川 竜之介/著	金の星社	1989	913/ア	児童 閉架	
★	影燈籠	稲垣 達郎/編集	日本近代文学館	1983	918.68/アク	一般 閉架	
★	邪宗門	稲垣 達郎/編集	日本近代文学館	1983	918.68/アク	一般 閉架	
★	地獄變	稲垣 達郎/編集	日本近代文学館	1983	918.68/アク	一般 閉架	
★	齒車	芥川 竜之介/作	岩波書店	1979	文庫/913.6/アク	一般 閉架	

宇野浩二

★	独断的作家論	宇野浩二/著	講談社	2003	文庫/910.26/ウ	一般 閉架	
★	文学の青春期	宇野浩二/著	沖積舎	1986	910.26/ウ	一般 閉架	
	宇野浩二回想	川崎長太郎/ほか編	中央公論社	1979	保存/910.268/ウノ	一般	
★	宇野浩二伝	水上勉/著	中央公論社	1976	910.268/ウノ	一般 閉架	
★	宇野浩二全集 第1巻	宇野浩二/著	中央公論社	1972	全集/918.68/ウノ/1	一般 閉架	
★	宇野浩二集	宇野浩二/著	日本書房	1960	910.26/ウ	一般 閉架	
★	思ひがけない人	宇野浩二/著	宝文館	1957	914.6/ウノ	一般 閉架	
★	枯木のある風景・枯野の夢	宇野浩二/著	岩波書店	1954	文庫/913.6/ウノ	一般 閉架	
★	うつりかはり	宇野浩二/著	中央公論社	1950	913.6/ウノ	一般 閉架	
★	青春の文学	宇野浩二/著	文潮社	1949	910.26/ウ	一般 閉架	
★	十五少年	宇野浩二/著	童話春秋社	1949	913.6/ウノ	一般 閉架	
★	童話集 ふきの下の神さま	宇野浩二/著	童話春秋社	1948	913.8/ウ	一般 閉架	
★	小説の文章	宇野浩二/著	創芸社	1948	910.2/ウ	一般 閉架	
★	作家と歌人	宇野浩二/著	全国書房	1946	910.26/ウ	一般 閉架	
★	つばめとへうたん	宇野浩二/著	有明書房	1946	913.8/ウ	一般 閉架	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

中谷孝雄

	超短編アンソロジー	本間 祐/編	筑摩書房	2002	文庫/908.3/チ	一般	
★	招魂の賦	中谷 孝雄/著	講談社	1998	文庫/913.6/ナカ	一般 閉架	
★	ふるさと文学館 第28巻 三重		ぎょうせい	1995	918.6フ28	一般	
★	ふるさと文学館 第31巻 京都		ぎょうせい	1995	918.6フ31	一般	
★	あんそろじい旧制高校 第4巻		国書刊行会	1991	377.3/ア/4	一般 閉架	
★	現代短編名作選 4	日本文芸家協会/編	講談社	1979	文庫/913.68/ゲ/4	一般 閉架	
★	わが陶淵明	中谷 孝雄/著	筑摩書房	1974	921.4/ナ	一般 閉架	
★	日本短篇文学全集 1	臼井 吉見/責任編集	筑摩書房	1969	913/ニ/1	一般 閉架	
★	創作代表選集 25(昭和34年後期)	日本文芸家協会/編	講談社	1960	918.6/ソ/25	一般 閉架	
★	創作代表選集 12(昭和28年前期)	日本文芸家協会/編	大日本雄弁会講談社	1953	918.6/ソ/12	一般 閉架	

田畑修一郎

★	ふるさと文学館 第38巻 鳥根		ぎょうせい	1993	918.6/フ/38	一般	
★	日本随筆紀行 14		作品社	1989	915.68/ニ/14	一般 閉架	
★	日本の名随筆 18		作品社	1984	全集/914.68/ニ/18	一般 閉架	
★	日本の名随筆 19		作品社	1984	全集/914.68/ニ/19	一般 閉架	
★	田畑修一郎全集1	田畑 修一郎/著	冬夏書房	1980	全集/918.68/タバ/1	一般 閉架	
★	田畑修一郎全集2	田畑 修一郎/著	冬夏書房	1980	全集/918.68/タバ/2	一般 閉架	
★	田畑修一郎全集3	田畑 修一郎/著	冬夏書房	1980	全集/918.68/タバ/3	一般 閉架	
★	日本の文学 79	谷崎 潤一郎/[ほか] 編	中央公論社	1979	918.6/ニ/79	一般	
★	土とふるさとの文学全集 8		家の光協会	1976	918.6/ツ/8	一般 閉架	
★	現代日本文学大系 91		筑摩書房	1973	918.6/ゲ/91	一般 閉架	
★	日本短篇文学全集 44	臼井 吉見/責任編集	筑摩書房	1970	913/ニ/44	一般 閉架	
★	現代文学大系 64		筑摩書房	1968	918.6/ゲ/64	一般 閉架	
	現代日本小説大系 第54巻	日本近代文学研究会/ 編集	河出書房	1951	保存/913.68/ゲ/54	一般 閉架	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

外村繁

★	「阿佐ヶ谷会」文学アルバム	青柳いづみこ/監修	幻戯書房	2007	910.26/ア	一般	
★	心にふるさとがある 16	作品社編集部/編	作品社	1998	大活915.68/コ/16	一般 閉架	
★	現代日本文学大系 63		筑摩書房	1997	918.6/ゲ/63	一般 閉架	
★	ふるさと文学館 第16巻		ぎょうせい	1995	918.6/フ/16	一般	
★	日本の名随筆 別巻42 家族		作品社	1994	914.68/ニ/B-42	一般	
★	霽標・落日の光景	外村繁/著	講談社	1992	文庫/913.6/トノ	一般 閉架	
★	日本の名随筆 別巻8 将棋		作品社	1991	914.68/ニ/B-8	一般	
★	現代短篇名作選 2	日本文芸協会/編	講談社	1979	文庫913.68/ゲ/2	一般 閉架	
★	日本短篇文学全集 27	臼井吉見/責任編集	筑摩書房	1968	913/ニ/27	一般 閉架	
★	日本文学全集 71 名作集		新潮社	1967	918.6/ニ/71	一般 閉架	
	現代文学大系 30		筑摩書房	1965	918.6/ゲ/30	一般 閉架	
★	日本現代文学全集 講談社版 84	伊藤整/ほか編集	講談社	1965	918.6/ニ/84	一般 閉架	

井伏鱒二

★	師・井伏鱒二の思い出	三浦哲郎	新潮社	2010	910.268/イブ	一般	
★	井伏鱒二・飯田竜太往復書簡	井伏鱒二/著	角川学芸出版	2010	915.6/イブ	一般	
	中間小説の黄金時代	井伏鱒二/著	日本経済新聞	2006	910.26/チ	一般	
★	井伏鱒二全詩集	井伏鱒二/著	岩波書店	2004	911.56/イ	一般	
★	井伏鱒二論全集成	松本鶴雄/著	沖積舎	2004	910.268/イブ	一般	
★	井伏鱒二全対談 上	井伏鱒二/ほか著	筑摩書房	2001	書架/914.6/イブ/1	一般	
★	井伏鱒二全対談 下	井伏鱒二/ほか著	筑摩書房	2001	書架/914.6/イブ/2	一般	
★	多基古村 山椒魚	井伏鱒二/著	小学館	2000	文庫/913.6/イブ	一般 閉架	
★	徴用中のこと	井伏鱒二/著	講談社	1996	913.6/イブ	一般	
★	井伏鱒二全集 第1巻	井伏鱒二/著	筑摩書房	1996	書架/918.68/イブ/1	一般	
★	知られざる井伏鱒二	豊田清史/著	蒼洋社	1996	910.268/イブ	一般 閉架	
★	黒い雨	井伏鱒二/著	新潮社	1995	913.6/イブ	一般	
★	井伏鱒二聞き書き	井伏鱒二/著	青弓社	1994	910.268/イブ	一般	
★	厄除け詩集	井伏鱒二/著	講談社	1994	文庫/911.56/イ	一般 閉架	
★	作家の自伝 94	佐伯彰一/監修	日本図書センター	1999	910.268/イブ	一般	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

浅見淵

★	早稲田作家処女作集	早稲田文学/編	講談社	2012	文庫/913.68/ワ	一般	
★	戦後占領期短篇小説コレクション 2	紅野謙介/責任編集	藤原書店	2007	913.68/セ/2	一般	
★	井伏鱒二		小学館	1990	910.26/イ	一般 閉架	
★	川端康成	日本文学研究資料刊 行会/編	有精堂	1976	910.268/カワ	一般 閉架	
★	浅見淵著作集 第1巻	浅見淵/著	河出書房新社	1974	910.8/ア/1	一般 閉架	
★	浅見淵著作集 第2巻	浅見淵/著	河出書房新社	1974	910.8/ア/2	一般 閉架	
★	現代日本文学大系 72		筑摩書房	1971	918.6/ゲ/72	一般 閉架	
★	現代日本文学大系 68		筑摩書房	1969	918.6/ゲ/68	一般 閉架	
★	昭和文壇側面史	浅見淵/著	講談社	1968	910.26/ア	一般 閉架	
	現代日本小説体系 第57巻	日本近代文学研究会/ 編集	河出書房	1952	保存/913.68/ゲ/57	一般	

資料協力

- ・古木家の方々
- ・鹿児島県 さつま町宮之城歴史資料センター
※特別展『古木鐵太郎の故郷への想い』 平成26年10月4日～11月24日開催
- ・鹿児島県 かがしま近代文学館
※企画展『没後60年 追憶の私小説家古木鐵太郎』平成26年2月13日～5月12日開催

中野区立中央図書館企画 中野区ゆかりの著作者紹介展示・第11回

古木鐵太郎の文学游歩

発行年月日 2015年3月20日

編集・発行 中野区立中央図書館

印刷物番号 26 指中教図中第423号

所在地 〒164-0001 東京都中野区中野2丁目9番7号

TEL 03-5340-5070 FAX 03-5340-5090

企画・製作／指定管理者 ヴィアックス・紀伊国屋書店共同事業体 中野区中央図書館ゆかり展示担当



中野区立図書館

<http://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/>